5月號

婦人運動

第6卷第4號



職業婦人社發行

大正十三年十一月二十二日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）昭和三年四月三十日印刷納本　同三年五月一日發行　第六卷第四號

家事科研究の最高權威書！ 甲斐久女史の五大名著

家事研究大系 第二巻 被服裝飾篇

甲斐久子女史著

菊大判五二八頁クロース最上製 口繪三色版數葉、挿畫多數

定價四圓八拾錢

凡そ今日ほど服飾の多樣複雜な時代はあるまい。其の形式に於て和洋支の各樣あるは勿論その材料、其の形態、色調等に至つては誠に千態萬樣、何人も一々之れが調製、整理、保存等に就て統整する知識と技術とを有するものはあるまい。本書は實に甲斐先生が西陣の本場を背景として永年學理的實際的に心血を注いで研究されし成果にして、全人類のあらゆる服飾に關し組織的體系を以て記述されしもの、家政上の寶庫たるは勿論受驗用、教授用として絶好無比の良書である。

家事研究大系（第一巻 食養篇）

菊判七〇〇頁 定價四圓八〇錢 送料廿七錢

現代作法精義

菊判四〇〇頁 定價三圓八〇錢 送料廿七錢

系統的家政講話

菊判八三〇頁 定價七圓 送料卅七錢

現代作法書

菊判二〇〇頁 定價九拾錢 送料十八錢

東京市麴町區下六番町
振替東京二九三六番

平凡社

電話九段 一六六四番 三四七五番 三六四七番

婦人運動 五月號 第六巻第四號 目次

尾崎行雄先生序

無産階級の新政策

新使命主筆 高野清八郎著

痛切なる吾等の要求を満たす空前の大快著

次の内容を見よ。。。。。。。

◇悲慘なる生活難と亡國を救ふ政策
◇富豪を保護し貧民を虐める我財政
◇實際は貧民の納める我國の直接税
◇何億の大會社も廿萬圓は納税せぬ
◇奇怪なる貧民と富豪の納税額
◇國民の階級別と財産所有の割合
◇富豪財閥が國家から取り返す金額
◇貧民の膏血を絞つて富豪に補助
◇國民生活を安定せしむる根本策
◇無産者の强唱すべき消費税全廢
◇日常必需品を暴騰せしめる關税
◇關税は全く財閥に暴利獲得策
◇勞働者の爲めに朝飯無税政策を
◇財閥保護の爲めに衰滅する我國運
◇國家の金を情實の爲めに濫費してゐる事實
◇二重の不利を防ぎ官營斷行の必要
◇財政改革の根本原則
◇課税の新學理
◇貧民と富豪の納税割合の學理
◇英國の廿分の一しか納税せぬ
◇日英兩國の所得税額
◇アイドルクラス(遊食階級)打破政策
◇日英兩國の相續税比較
◇財政大整理の必要
◇國費を半額に減じた米國
◇英國財政の大整理
◇非常なる英斷を行ふ英國と我國政
◇國費を半減し社會政策を行ふ
◇財政を半減したムッソリーニ氏
◇世界の趨勢に逆行した我國政
◇我國財政の膨脹する趨勢
◇國民負擔の激減する實況
◇國債の益々増大する趨勢
◇借金で亡滅する國を救ふ政策
◇フィリップスノーデン氏の新學說
◇悲慘なる我國民生活の現狀
◇生活難の爲めに自殺する人數
◇不良少年も貧困が原因
◇社會政策實行の急務
◇寡婦孤兒等の救濟策
◇遊食者に與ふる恩給を大整理
◇十五億の新財源を得る政策
◇無産階級最大の使命

附録

普選法全文、同選擧區費別表

◇理論闘爭に沒頭せる、現代の學者、思想家を冷罵して深刻なる『生活不安』を救ふ、實際政治上に於ける政策の最高權威

定價 金五拾錢
送料 金四錢

發賣 東京 東京堂、北隆館、大東館、上田屋、大阪 盛文館

發行所 東京市麴町區内山下町一ノ一
振替東京六九〇六九番
全國立憲青年同志會内
新使命社

婦人運動

五月號





家庭婦人としての反省

―婦人は消費經濟運動へ―

奥むめお

「婦人の参政權運動も、現在のやうに、二百や三百の知識階級婦人が都會のまん中で、それも議會を相手にして「われらに参政權を與へよ」と叫んでゐる位のことでは所詮仕様がない。萬々一、その叫びが聞き屆けられて婦選が實現したとしても、現在のやうに一般の婦人大衆が参政權の問題にまるで無關心でゐる限りは、折角獲得した權利も、所詮仕様がなくはないか。要は、もつと〳〵熱烈な火の如き叫びが婦人大衆の腹の底から叫びあげられて、その威力がつひに、權力者階級から参政權を奪取する！　この意氣込みでかゝつてゆくのでなくては何處に意義があり得やう」

×

私たちの斯ういふ意見に對して、婦人の中の識者は屢々かう反駁して來る。

「といふ意見はまことに最もで誰しもさう希づてゐることとであるけれども、如何にせむ、現在の大多數の婦人は家庭に閉ぢこもつて中々出て來ない。出て來たいと願ふ者も、子供や家庭的な雜務におはれて結局その餘裕がない。あの現在、餘裕のない暮しにおはれてゐる大多數の家庭婦人が參政權を要求して出かけて來るまで、それではその獲得を待つてゐなければならないのであらうか」と。

この種の反駁ぐらゐ私たちを歎かせるものはない。幾人もの子を持つて忙しい世の母たちよ、主婦よ、そして、或ひは薄給な勞働婦人、職業婦人よ。これらの現在忙しく貧しい生活を餘儀なくされて過勞の中にそのいのちさへ縮めてゐる婦人たちよ。現在の婦人參政權運動が、さういふ餘裕のない一般の婦人大衆に比しては、可なり自由な生活様式を許されてゐるところの極めて少數の人々――時間の上にも、金子の上にも、氣持の上にも餘裕のある人々、婦人としては比較的上部層に位するところのいはゆる知識階級婦人ブルヂョア婦人たちに依つて行はれてゐるといふことについて、そして、餘裕がなくて入つて來れないやうな連中は結局仕様がないぢやありませんか、と云つた風な態度について、私たちはこの際大いに考へてみる必要がありはしないだろうか。

×

婦人運動を以て、家を外にして、或ひは職業的な勞務に妨げられること少なく、自由に演壇に上つたり、集會に出かけたり、團體に加盟したり、機關誌を讀んだりすることだけに曲解する人々は、屡々、婦人運動から一般の婦人大衆をおき去りにしたまゝ自己中心の道を急ぎ進まうとする。

然し、今日のやうな社會では、ごく少數の惠まれたる婦人を除いて、多くの婦人は餘裕なくその生活におはれてゐる。この點についてのはつきりとした認識なく、この大衆としての婦人の共鳴なく、又、その共鳴をうるための努力

なくして、どうして婦人の運動が正當な道を進むことが出來やう。

いや、むしろ云ひ得べくんば、餘裕なく生活におはれてゐるやうな婦人の中の大多數を占めてゐる人たちが、その生活のまつ只中から叫び上げて來るのであつてこそ、婦人參政權（ひとり參政權問題だけに限らず）の運動もはじめて地についた、眞實に婦人の生活を裏付けた叫びとして世をも人をも動かすことが出來るのではないか。

×

「では、大衆としての一般婦人をそこまで搖り動かして來るためには我々はどうしたらいゝだろうか」

かういふ質問を、或る日、或時、私たちはたび〳〵に聞くのであるが、これについては私は次のやうに云ひたい。

いはゆる婦人運動を、これまでのやり方とは全く逆に行く事だと。これまでのやうに抽象的な出發點から行はれた運動を最も具體體なポイントからやり直すことであると。例へば參政權といふ、一つの抽象的な目的を先づ置いて、そこに到達するための運動を婦人が起すといふのではなくて（從來のやり方はこれに屬するのであるが）婦人がその實際生活の中に持つてゐるいろんな具體的な要求、主婦ならば、生活の改善を圖らうにも先立つものは金子でないか主婦の時間に餘裕あらしめるために無料で家庭を電化してほしい。託兒所を澤山にほしい、消費稅を廢止して物價値下げを圖つてはしいといつた風な。そしてかういふ要求を主婦が貫徹するには直接に政治を左右し得る力卽ち參政權を持つてゐなければ駄目だ。と斯う氣づいて參政權の運動に入つて來るやり方――云ひかへるならば、日常生活の最中に味得する一つ一つ具體的な要求をそのまゝ政治運動にまで押し伸してゆく運動、これでなくてはほんとしに婦人大衆の聲とならず、又、その共鳴をかちうる事も六ケしいであろう。

從つて、私は全ての婦人運動がさうでなくてはならぬと主張したいのであるが――婦人運動の前線に立つ人々は、

たゞ社會の表面に立つて叫びをあげるだけではなく、婦人の日常生活をもつと深く掘り下げて行つて、そこからいろ〳〵な問題を見出しつゝこれまで半意識、無意識的にしか婦人が持つてゐなかつたやうな要求をも、これを具體化し社會の表面にまで引き出してゆくだけの協同意識（共同の利害に立つもの同志への愛、責任感）をつねにもつてゐる必要が大いにあると云はねばならぬ。

斯ういふことは、婦人自身にしても、抽象的な様々の婦人解放の叫びに輕はづみな動き方をすることの代りに、もつと眞劍に、全ての婦人がその人その人の生活を合理的に意義あらしめ、能率高からしめるために、改めてその置かれてゐる地位を、環境を、そして、社會組織を吟味し直すことでなくてはならぬ。と思ふ。

近頃婦人がその消費經濟生活方面に深い反省を向けて、そこから社會でにも動きかけやうとして來たことは、不景氣の結果もあろうし、新聞や雜誌の記事の刺戟も勿論あらうと思ふのであるが、とにかく家庭婦人としての婦人運動が、初めて婦人として獨自の、婦人運動としては當然かくあらねばならぬ本來の出發點を見出しかけたものと云つていゝだろうと思ふ。この傾向について人の中には、

「婦人參政權などいふ問題よりは、この方が婦人としてはもつと實際問題ですからね。實際、參政權運動よりはまづ消費經濟運動ですよ」と、云ふ者も尠くないのであるが、さう見るのは謬りであつて、婦人參政權運動は、かういふ風にして臺所から、最も一般的な婦人の生活である消費經濟運動から出發して、初めて、ほんとうに大衆的な婦人の參政權運動の基礎が出來上るのである。やがて起るべき大衆運動としての婦人參政權運動の基礎石が、今日やうやく据えられたともいふべきであるのだと私は云ひたい。

婦人運動は大衆運動として進まねば駄目であることを日頃力說する私は、婦人參政權運動も、われ〳〵の消費經濟生活の再吟味から出發して初めてほんとうに大衆的な婦人の運動になり得るものであることを固く信じてゐる。

時評



第五十四議會の展望

帝國議會と云へば、日比谷のお猿芝居の事ですと、今では小學生の答案にでも出さうな程、通り言葉になつてゐた議會も、今年はどうやら多少眞劍味が出て來たやうである。いつもならばもういゝ加減御大典と云ふ安全地帶を置いて、勢力の伯仲した與黨在野の二大政黨の間に所謂鬮廻しか始まる筈の段取りだが、見た處どうやら八百長拔きの本勝負らしい。それに今迄なら中立と云ふ灰色議員が尻だけをあつちへ浮かしたり、こつち浮かしたりして、不見轉を稼ぐ處だが、さうした連中もないではないとしても、兎に角明政會なんかと云ふ自由主義的小黨が現はれて、表向だけでも多少は國民の實生活に關係のある具體的な政策を掲げて、二大政黨をぐん／＼押して行く處、況や無産政黨と云ふ新加入者が新興階級を背景にして頑張つてゐる點、何んと云つてもその一脈の緊張味は普選の結果と云はなければならない。甘いやうでも一千萬に近い新興階級の眼が光つてゐる以上、既成政黨もこれ迄のやうな音ばかり大きい太鼓だけでは、芝居が打てなくなつた苦悶があり／＼と見える。

一體これまでは政友會にしても、民政黨にしても、その政綱は下手な漢學生の作文見たやうなもので、國民の實生活には頭を划ねるより他に關係のないものであつたが、よしニツケル鍍金にもしろ、明政會が檢察制度の獨立、黨費公開、財產稅、相續稅、超過所得稅の累進賦課案等を突きつけて、二大政黨の眼を白黑させてゐるのは見物である。

無産政黨は階級的立場の嚴守と云ふ重大な使命を持つてゐるだけに、差當り天下分けめの不信任案には合流の一手で押すより仕方がないが、與へられた發言の機會に於ては、傳家の寶刀、特權政治のバクロ、反動政治のバクロを敢へてする事に依つて、次第に目醒めつゝある全無産階級の爲めに、最も效果的なメガホンとしての活躍振を見せてくれるであらう。

雨か風か、既成政治家の聲明は當にならぬ天氣豫報よりも更に當にならないので、先の事は解らぬが、いづれにしても本議會を轉機として、政友會はその反動的色彩を益々露骨にするであらうし民政黨は、勢ひ多少自由主義的傾向をもつやうにならざるをえなくなるであらう。それ等のブルヂョア政黨の對蹠的立場に立つてゐる無產政黨は、その二大勢力に對抗する必然の歸納として各無產黨の合同即ち單一無產政黨への過程へ、過速度を加えて進んでゆくであらう。

無自覺だとか、蒙昧だとかいはれてゐる大衆の力が、その本心に於て決してそんなものを要求しない既成政黨に普通選擧を强要したやうに、個人々々を引出してみれば一凡人にしかすぎないこの存在が、不思議な力を以て舞臺を轉換させてゆくことは、時勢の然らしむる處といはねばならぬ。婦人の問題としても、同樣のことが云ひ得られる。普選直後の此の四十五議會を轉機として各政黨が、無產黨は無論、そんなことは鼻の先きで吹いてゐた既成政黨までもが、大急ぎでこの魔訶不思議な大衆の、半分である婦人力をかち得るに爲、その先陣を爭ふであらうことも、興味ある展開であると共に、婦人としてはその階級的立場を明確に見定めるべき大切な時であらう。

農民戰線統一へ

一

全農民大衆の要望たる、農民戰線統一の爲の全國農民團體合同協議會は四月五日、六日大阪中の島公會堂に開かれた。その協議會に於ける右翼幹部の大衆への公約、三農民團體（全日本農民組合、全日本農民組合同盟、日本農民組合）への申合事項蹂躙は、遂に會議を決裂せしめ、合同運動を一時停頓せしめた。

然し農民大衆は熱烈に戰線の統一、鬪爭力の集中を要求して居る。此の要求は幹部の合同拒否の妨害をはねのけ大衆自から過去の運動を批判し、戰線の統一、農民組合運動の新方針の確立へと進みつゝある。此の大衆の壓力は必ずや支配階級の分裂政策と策應する一切の分裂主義的傾向を克服して、戰線の統一、農民組合運動の新方針を確立するであらう亦させねばならぬ。これこそ統一派として立つ農民組合に課された重大な任務である。

二

最近、戰線統一の運動が、何故に農民組合運動の方面に進展して來たかと云へば、

一、かつて農民の統一戰線だつた、日本農民組合の第一次分裂（山梨縣聯合會の脫退——全日本農民組合同盟の成立）及び第二次分裂（日本勞農黨幹部拾貳名の除名——全日本農民組合の成立）を通じて、日本農民組合の指導者は『結合の前の分離論』『他カップして取る』といふ戰法で猛裂なる、對立鬪爭を展開した。

昨年の日本農民組合大會に於ては全

無產階級的政治意識を戰ひ取る轉換を行はんが爲に、對立鬪爭を果敢に、敢行する事を決議し、此の二重團體主義に基く鬪爭が組合と組合との間に展開され、地主に對する鬪爭力は著るしく減少し、農民組合の量的發展——未組織大衆　獲得といふ事は之を口にとなへても實際行れなかつた。

實際の鬪爭に於ける組合の無力化對立鬪爭とは未組織農民のみならず、組織農民の信頼も減少し、それは農民組合の日常鬪爭を不活潑となり、會費の滯納、組合運動に對する各支部の日和見、各聯合會のサボタージュ、組合本部に對する不信等となつて現れ、日本農民組合幹部をしてすら「總本部にもつと名聲の高き人をおき、農民の信望をつなぐこと」を叫ばしむに至つた。

二、地主の攻勢——立入禁止、立毛差押の猛襲　農民組合運動の進展にともなつて、地主の全國的結合、立入禁止立毛差押の猛襲、土地會社による耕地の收奪等は地主に依つて展開されそれは大衆をして鬪爭力の增大と新爭議方針の確立を要求するに至らしめて居る

三、一切の經濟的政治的日常鬪爭に於ける支配階級の極度の壓迫は田中反動內閣の成立からその極に達し、小作官と裁判所と地主とは完全に一致行動を取るに至つた。

小作爭議に於ける刑事事件の頻發、小作調停法による農民組合撲滅策は此の事實を雄辯に物語つて居る。

四、斯る形勢に於て、經濟鬪爭より全無產階級的政治鬪爭への轉換は組合と政黨とを混同せしめ、組合を黨の從屬物の如く考へ、組合の獨自性は失はれ組合は極度に疲弊した、故に組合と政黨とを截然と區別する必要に迫られた

三

以上の如く、地主の攻勢、政治運動への進出は、地主の鬪爭力增大の爲に農民大衆をして必然に、戰線統一と、新しき農民運動の方針の確立を叫ばしめ、昨年末の全勞農政黨の合同運動、總選擧に於ける農村方面の失敗等は益々大衆をして戰線を統一すべきを痛感せしめ合同を拒否し來れる分裂主義幹部を動かして上からの正式交涉を開始せしめ、三月拾六拾八日の合同の爲の懇談會、四月五日六日の合同協議會迄合同運動を進展せしめたのである。然しそれは右翼幹部の分裂主義に依つて決裂したが、大衆は常に分裂反對である、運動の客觀的狀勢は統一を迫つて居る。

斯る時機に大阪に於て四月廿一日廿二日日本農民組合、廿五日全日本農民組合の大會は開催されんとして居る、此の二つの大會は必ずや過去の運動を嚴正に批判し、淸算すべきものは淸算して一路戰線統一の爲に鬪ふであらう

一切の分裂主義的傾向を克服して一路統一へ進め。

その壓力を以て勞農政黨の統一を完成しろ！

農民戰線の統一、勞農政黨合同萬歲

（淺沼稻次郎）

汎太平洋會議婦人に小女敎員會奮起す

女敎員雜誌「かゞやき」編輯者平田のぶ氏は、汎太平洋婦人會議に兒童代表の缺けてゐる事を慨して、左の如き提議を發した。

『汎太平洋婦人會議の重大問題は勞働婦人問題と、兒童敎育問題とだと思ふ現下の社會狀態から、又會の性質から當然の事だと思ふ。

　然るにその代表の顏ぶれを見るに、社會的に有名な、內容的には敎育業者でしかない。有名とは一般婦人大衆に緣なき事を意味し、敎育業者とは敎育にゆかりなき事を表はす。從つて無名にして兒童敎育實際家たる我々小學校女敎員とも、また緣もゆかりもなき存在である。どうして我々の代表として代辯者として認め得ようぞ。全國七萬の我々小學校女敎員の要求を問ふ事なく、コソ〳〵と所謂有名なる人達に決定して終つた事は、何といつても默認し得ない事件である。私はこゝに彼等代表を認めざる事を宣言し、併せて、兒童代表を送らんことを期す。』

　同時に平田氏は、女敎員へも檄を飛ばして警告して曰く、

「どうしてみなさんはだまつてゐるのです。『どうせ自分に廻りつこはない』そんな〳〵ケチな了見では、我が愛する姉妹はないと思ひます。私共は、私共の仲間から、私共の日本初等敎育を紹介してはぢない人を出す權利と義務とがあると痛感するの誠意を持つてほしい。……何んといふ意氣地なし、何といふ利己主義だと笑はれぬ前にお立ちなさい……』と。更にあらゆる敎育關係の新聞雜誌に書を寄せて、一般敎育界の注意を喚起し、輿論を高かめる事を勉めた。

　平田氏の叫びは遂に女敎員を動かした。勇敢にして、獻身的なる女敎員會幹事は、滿場一致を以つて代表を送る事を議決したのである。先づ代表選定に策動した井上秀子氏に抗議を發すると同時に一方その資金調達のため幹事會は音樂會と、會員一般よりの募金を企てたといふ。とかく弱者視された女敎員の此勇敢なる戰に對して、一般職業婦人勞働婦人が自分らの眞の代表者を同會に送るために進んで協力することは現在不可能であるとしても、せめて女敎員會のこの擧には友誼的聲援を吝しまないでほしいものである。

　この會議の由來を少し說明するならば、一昨年汎太平洋婦人會議の主催者側から、書をわが日本へも個人宛に寄せて、その出席を希望して來た。出席を希望して來た人達は、和田富子、奧むめお、平塚明子、市川房枝、羽仁もと子、井上秀子、山川菊枝、與謝野晶子、其他數氏。從つて代表選定に當り此等の人達に一度の挨拶あつて、その意向を伺ふ事は、個人に對して、又同會に對しての禮儀である當然の義務である。代表選出の衝に當つた井上秀子氏が縱令、個人的に憎惡の感を持ち或は思想的に相容れぬものがあるとして

も之を無視して、私情的因緣によつてコソ〳〵決定したといふ非難はまぬがれ得ないであらう。

會議の內容と決定せる代表

兒童幸福增進問題

一、兒童健康
二、兒童訓育と兒童心理
三、少年犯罪の豫防と科學的改校法
四、疲勞恢復の爲めの共同食事
五、被保護兒童及び孤兒保護
六、敎育の新標準
七、少年勞働

婦人問題

一、投票者としての婦人
二、政黨と婦人
三、公職と婦人

勞働問題

一、婦人戶外勞働の歷史と發達
二、婦人の職業範圍
三、被雇狀態
四、婦人雇傭の法律制定

敎育問題

一、家庭經濟
二、就學前の敎育
三、新式敎育
四、藝術敎育
五、民俗學
六、體育
七、敎育の精神上價値

健康問題

一、太平洋沿岸諸國に兒童局を創設し人命統計、優生學、胎兒保護、兒童保健問題を研究する件
二、性敎育につきて
三、兒童の家庭委託問題
四、幼兒、兒童、姙婦の營養及流行病につきて

社會問題

一、社會問題と社會制度
二、早敎育問題
三、庭に於ける產業政策の效果
四、近隣關係の變化
五、近代科學の必要と應用

そして日本代表として決定したものは

井上　秀　子氏(日本に於ける女子高等敎育)
大江すみ子氏(家事科敎育)
大多和たけ子氏(高等女學校に於ける性格敎育)
古屋登代子氏(女子敎育)
市川　房　枝　(日本に於ける社會問題)
井出　菊　江氏(公職における婦人)
吉岡　彌　生氏(健康)
藤田たき子氏(社會事業)

これに、女敎員會より割込んでゆく一人と、目下讀賣新聞社にて一般投票を募つてゐる婦人職業及び勞働問題擔任の婦人代表一人、當選者が派遣されてゆく筈である。(岡田敏子)

五月例會讀者懇談會に集れ!!

五月十二日(土曜)午後五時半より
於　職業婦人社

職業婦人運動に關する第一回協議會

職業婦人の團體はどう組織されなければならぬか。最も切實な職業婦人問題として、社會に叫びあげなければならぬ當面の問題はどんなものであるか一般の職業婦人が現在、一番に必要としてゐるものは何か。等について話し合ひませう。職業に就いてゐらつしやる方はみなこの集りにお出かけ下さい

婦人參政權私見

赤松明子

去る二月二十日に行はれた總選擧は、それが初ての普選であつたといふばかりでなく、婦人參政權に對する世人の注意を喚起した點に私は重大な意義を見出す。その重なる原因としては、先づ第一に此度の總選擧に於ける婦人の目醒ましい活躍を擧げることが出來る。勿論從來の選擧に於ても全然婦人が關係しなかつたといふわけではない。例へば選擧にはつきものゝやうに考へられてゐる某々女史の戶別訪問などはあまりに世間に知れ渡つてゐる。けれども今までの所謂婦人の選擧運動は夫または父親の運動を助ける意味に於ける男子の附隨的運動に過ぎないのであつて、此度の選擧のやうに婦人が婦人解放の意識に基いて自主的に活動したことは、何と云つても今次の選擧に於ける一異彩である。この實驗の結果、從來婦人參政權に對し時期尚早を唱へてゐた人々はその考を改めなければならなくなつてきたし、また今日まで頭から之れを否定しかゝつてきた人も眞面目に之れを取扱はなければならないやうになつてきた。一方婦人の側に於ても、婦人參政權に對する要求が、一部女權主義者のそれではなく、全く婦人大衆の切實な要求となつて現れて來た。「普選より婦選へ」といふ聲は到る處に叫ばれてゐる。そして婦人參政權に對する輿論は高まりつゝある。此の時機に私達無產階級婦人は如何なる立場に立つて此の運動に參加すべきかといふことを考へるのは最も重要なことだと思ふ。

婦人に參政權を與へるべきや否やは旣に過去の問題であつて、現在に於ける問題の中心點は、如何なる方法によつて婦人參政權を獲得すべきかにあると思ふ。之れには二つの方法がある。その一つは從來婦選獲得同盟等の女權主義者の採つ

た方法、卽ち婦人參政權運動に好意と理解を有する代議士（この場合には既成政黨者たると無産政黨者たるとを問はぬ）を動かして、婦人にも選擧權を與へるやうに選擧法を改正する法律案を提出せしめ、尙ほ他の多くの婦選贊成代議士を說いて之れに贊成投票をなさしめ、そして婦選を獲得する方法が之れである。現に此度の選擧に當つて、婦選獲得同盟の人々は、婦選に贊成の候補者であれば、政友會であらうが、民政黨であらうが、實業同志會であらうが、おかまひなしに應援演說をして步いてゐたやうである。他の方法は、新らしく政治的進出をして來た無産政黨の代議士によつて無産階級的婦人參政權を獲得する方法である。この二つの方法を比較してみると、如何でもかうでも一日も早く婦選を獲得するためには前者の方が早道であるかも知れない。しかしその結果は憂ふべきものがあると思ふ。未だ政治的教育の不十分な感情に支配され易い婦人は、より以上既成政黨に欺かれ勝ちである婦人に參政權を與へれば保守黨が勝つ傾向があることは既に先進國に於て經驗されたところである。英國に於て然り、獨逸に於て然りである。また此度の普普初頭の選擧戰に於て無産階級的新有權者が、自分の味方である筈の無産黨代議士には投票せずして、唯だ僅かのお金によつて、己れの搾取者の代表者既成政黨候補者に投票したことを考へる時、私は、明確な無産階級的意識を含まない漠然とした婦人參政權には絕對に反對する。

しかしかう云ふ人があるかも知れない。勿論第二の方法が好ましいことはわかりきつたことであるが、無産黨が獨自の婦人參政權法案を通過せしめ得るまでには何年かゝるかわからない。今から三十年五十年先きの事であるかも知れないと私はこの點に就いてはかう考へる。勿論無産黨代議士が議會に過半數を占めるまで待つとすれば先の長い話であるが、婦人參政權を獲得するのには必らずしも過半數の無産黨代議士を必要としない。それよりももつと重要なことは婦人參政權に對する婦人大衆の輿論を喚起することである、婦人大衆の輿論の流れが日一日と水量を增して、どん〳〵强固な堤を以つてしても堰き止めることが出來なくなつた時には、堤は獨りでに壞れる。唯だこの時に、堤を切つて溢れ出た流れを正しき方向に導く少數の助手があれば、それで十分である。故に私達に必要なものは過半數の無産黨代議士ではなく、最も强固な婦人大衆の輿論の力である。試みにこの普選法通過當時

の議會内外の狀態を考へてごらんなさい。議院内に於て多數の代議士が、必死の力をもつて普選法の通過を阻止したにも拘らず議院外の輿論の力に壓倒され引づられて、不承々々之れを通過せざるを得なかつたのではないか。婦人參政權は與へらるべきものではなく、私達婦人大衆の力によつて獲得すべきものである。

　最後に最も重要なことは飽くまで無產階級的立場に立つて婦人參政權運動を續けて行くことである。之れは一見疑ひのないことに思はれるが、現在婦人參政權運動者間に問題となつてゐるのはこの點であると思ふ。既に述べたやうに、女權主義を一歩も出ない人々は「なんでもいゝから一日も早く婦人參政權を欲しい、さうすれば後はどうにでもなる、それがためには既成政黨だらうが、無產政黨だらうが、その思想はどうでもよい、婦人參政權に贊成者であれば誰れでもよい」と云ふ。之れに反して私は、婦選が與へられるのは一日遲くてもよいから、眞の無產階級的婦人參政權を獲得しなければならないと思ふ。即ち私は無產黨の代議士による婦選法の通過にあらずんば、今直ぐに婦選を貰はないでもよいとまで思つてゐる。その間私達は、一方婦人大衆の輿論の喚起に努めると共に他方一度び婦選が與へられたならば、それを最も公明にまた最も有效に行使し得るやうに一般の婦人大衆を教育することに全力を盡す方が急務であると信ずる。眞の婦人の解放は無產階級の解放なくして行はれないことを固く信ずる私達無產階級婦人は、無產階級的婦人參政權獲得のために最後まで戰はねばならぬ。

五、婦人兒童の鬪爭參加

（二十一頁より續く）

　一月十六日より、小學兒童は盟休を開始した。彼等は、數年間、間接に組合の訓練を受けて居るので、無意識の中にもよく今回の罷業の性質を心得て居る。彼等は「父と共に戰ひに立つ」と考へて居る。彼等が、落第を覺悟して、一生懸命になつて居るのを見ると、この不正義極まる資本主義社會に對する、憤激とともに、亦一種暗然たる心持にならざるを得ないのである家族の人々も、勞働組合に對する信念は殆んど宗教的である。彼女等は、何等ためらふところも、恐れるところもなく、敢然として戰つて居る。一月下旬、妻女が數名檢束された爲めに、數十名の妻女と子供が、警察へ押し寄せて自ら檢束を迫つた事件もあつた。彼女等は少しも理論は知らぬ。然し勞働組合に對する確固たる信念を持つて居るのである。

野田に於ける勞働爭議

齋藤健一

一、城を枕に討死の覺悟

野田に於ける勞働罷業の開始されたのは、昨年九月十六日の事である。それで、今日（四月十四日）迄、二百十二日を算へ、滿七ケ月を越へた譯けである。新聞紙上には、再三之が解決を報導されたけれども、事實はなか〳〵困難であつて少しも豫想を許さないのである。

我國の過去に於ける勞働爭議で、期間の最長の記錄は、一昨年春の濱松樂器爭議であつたが、之とても百四日を出でなかつた。野田爭議は既にこの倍の日數を繼續して、未だ今後何日續くか分からぬ狀態である。

今や、一千三百の組合員（舟業爭働者も加へて）六千の家族は、城を枕に討死する覺悟を以つて、勞働組合に殉ぜんとして居るのであるが、まことに、反動政府と頑迷なる資本家に依りて、打ち込まる丶七千の人柱に、野田の天には一道の凄氣が漲つて居るのである。

そも〳〵、この大勞働爭議は、どうして惹起されたであらうか。

二、痛ましき茂木の奴隷

野田醬油株式會社を組織する茂木一家は、一億三千萬の資産を有すると云はる丶。龜甲萬其他の醬油を製産して居るのであるが、大正十年、日本勞働總同盟に屬する勞働組合が組織されたる當時、及それ以前は、勞働者を目すること、文字通り牛馬の如く、或古老の語るところに依れば、大正六年前には、どんな腕き丶の熟練工でも、一ケ年五十五圓位ひの給

料であつた由である。それから大正七年には最高百圓、大正九年には最高二百三十圓、大正十年には百八十圓に下つたのである。

そこで、こゝの勞働者は妻帶する事が出來ないので、七割から八割の人々は獨身者として、ヒロシキと稱する合宿所に寢起して居たのであつた。ヒロシキは莚の天井、木の枕、石油の空罐で鍋の代用と云ふ、嘘の樣な慘めなものであつた。たま〳〵妻帶者の如きは、右の樣な給料ではとつても食つて行く事が出來ぬので、ヒロシキの飯を着物の內ポケットに入れて持ち歸り、之を妻に子に分け與へて居たのである。ところが、飯の熱いのを、毎日このポケットに隱して持つて來るために、胸が眞赤に腫れて、しまいにはこれが癒へ固まつて妙な痕跡を後したと云ふ。現在でも、この傷跡を持つた年輩者が相當居ると云ふ事である。何と云ふ痛ましくも氣の毒な話であらう。

茂木が勞働者に對しては、奴隷に臨む君王の如く、絕對專政であつた。解雇する場合も無一文、怪我をしても死んでも殆んどそのまゝで、手當の如き死んだものでも十圓が相場であつた。

茂木一家に屬する會社の取締役茂木佐平治の現邸宅は、百餘萬圓を投じたるもので、表門の如きは一萬圓を費ひした程である。

茂木は銀行を持つて居るが之を商誘銀行と云ひ町には劇場があるが之を笑遊劇場と稱し、其すべてが、醤油に音を通はせ、小學校に茂木の寄贈した新築校舍には龜甲を裝飾に用ひる等、茂木の支配は隅から隅まで及んで居たのである。かつて、彼等の結婚式には、町の表通りに白砂を敷き詰めて、一般の通行を禁止したる事もあつたと云ふ。以つて其すべてを知る事が出來るであらう。

三、勞働組合茂木に肉迫す

勞働組合が組織せらるゝや、木枕を廢止せしめ、莚の天井を去らしめ、やがてヒロシキを全廢せしめ、進んで年限め給料を日給制に改め、賃銀の値上を要求して之を貫徹する等、次第に茂木の搾取に對抗して、之が支配に肉迫して行つたのである。之が爲めに、勞働者は漸く家庭を營む事が出來る樣になり、收入の增加に從つて彼等の生活も次第に向上したのであつた。

私達が、組合發會式に行つた頃は、野田町は、陰慘たる印象を與へる町であつた。

有るものは、日用品の僅かを賣る店と、煎餅屋と、銘酒屋のみであつた。醤油の香に滿ちたこの町は、いかにも茂木に搾取し盡くされて居るかの如く、おしつぶされた樣に並んで居たのであつたが、現在は、書店がある。カフエーがある。洋品店がある。相當な菓子屋がある。

野田町の文化は此くの如くに向上したのであつた。

陰慘なる生活の中に、何等の希望なき奴隷は、安酒をあふる事と、賭博と女を買ふ事であつた、而し、勞働組合運動に依つて、彼等は明かに人生に希望を認め、彼等は驚くべき熱心を以つて、向上の道を進んだのである。

勞働組合の組織は、次第に充實して、昔の醤油屋者は、こ組織を通して、異状の力を實現して來たのであるが、彼等は關東一帶に亙つて、群馬、栃木、茨城、千葉、埼玉、東京、神奈川等の各縣に亙つて、廿數箇の支部を組織し、勞働學校を起し、消費組合を經營し、政黨を組織し、町會に數名の議員を有し、縣會に國會にそれ〲代表者を送らんとしてあなどり難い力を示し來つた。

而して、かくの如く、勞働者が、獨自の力を以つて、進步し向上し行く事に對し、茂木は感情的反感を持たざるを得なかつた。彼等にとつては、「醤油屋者」が、妻帶することが既に贅澤に思へる事であつた。現にそれを口にして居る者があるのである。況んや他の事おやである。そしてこの感情からと、更に昔の如き搾取を夢みる事と、この二つが常に茂木をして、組合打ち壞しの强固な意志をつくり上げたのであつた。

かくして、茂木一家は、あらゆる手段を盡くして組合破壞に努力し、大正十一年の如きは、組合幹部小泉七造君を暗殺せんとする計畫を立て、反對に組合員の爲めに、刺客が殺害さるゝに至つた事件の如きは、「野田の殺人事件」として、よく人の知る處である。今回大爭議の原因たる丸三運送店問題も亦、この組合破壞精神の露骨なる現れであつた。茂木が組合破壞の根强き精神と努力を無視して、この大爭議の眞相は判明しない。即ち組合破壞の精神が唯一の原因であり、鬪爭展開の根本動力であるのである。

四、七ケ月の大鬪爭

昨年四月十日、組合が待遇改善の要求をなすや、會社は、其經營狀態よりして充分之を行ひ得餘裕あるにもかゝはらず拒絕した。依つて五月一日より罷業が開始される筈であつたが、問題の平和的解決のため、更に十日間の延期をなし、勞資及第三者を加へたる待遇改善要求案に關する調査委員會の設置を提案したが之亦拒絕するところとなつた。而し乍ら、當時財界の恐慌時に鑑み、且、あくまで平和的解決に努力すべく、無期限に要求案の保留をなして、危やふく罷業を轉回し得たことは、御承知の通りである。

然るに茂木は、この機會に乘じて、(殊に田中反動政府の成立に力を得て)かねてより一刻も忘るゝ事の出來なかつた、組合破壞の目的を貫徹せんものと、各工場に於いて、種々なる策動を行つたが、六月下旬よりして、會社の運輸部とも云ふべき丸三運送店内の組合の自然消滅をなさしめんため、新に丸本運送店なるものを設立して、之に荷物を集中し始めたこゝに於いてか百餘名の從業員、數百名の其家族は、失業して生活の道を斷たれる危險にさらされたので、組合は嚴重に抗議し、再三組合の讓歩的態度に依つて協定が成立したが、依然としてこの協定を無視したので、遂に九月十六日から大罷業の決行となつたのである。

罷業開始せらるゝや、會社は數百名の暴漢人夫を雇入れて暴力團を編成し、暴力的挑戰によつて、組合側の暴力的行動を誘發し、官憲の峻嚴なる斷壓を豫想して、組合の壞滅を試み、或は暴力を以つて組合員を工場に奪還せんとし、スパイ遠島某と云ふ札付者を數萬金を以つて雇入れて、購買組合の差押へ、幹部のいはれなき中傷に奔走せしめ、職業的反動團體を利用して組合の壓迫を行ふ等、言語に絕する奸策を弄し組合の結束鐵の如きを見るや、十二月十九日迄に、一千數百名(船業從業員も加へ)を解雇するに至つた。

組合は、統制を嚴にして、會社の奸策に乘ぜらるゝなきを期し、購買組合の運用を圓滑にして財的持久力を整へ、米、味噌、醬油、薪炭に限定して、家族に配給をなし、以つて今日に至つた。殊に關東醸造勞働組合加盟支部は、月收の二分の一乃至三分の一を標準として、毎月之を寄附し、我關東勞働同盟會は寄附金と共に加盟組合の基金を動員して之に充てこの種の金額のみを以つてしても、今日迄費せるもの既に六萬圓に近づき、其他一切の罷業費は概算して十數萬圓に上る譯けである。(以下一七頁につゞく)

蒼馬の夢を見た

林　芙美子

だがね……
腕の痛む留置場の窓に
遠い古里の蒼い馬を見た私は
父よ
母よ
元氣で生きてゐて下さいと呼ぶ。

忘れかけた風景の中に
しほしほとして歩む

1.

古里の厩は遠く去つた
花が皆ひらいた月夜
港まで走りつゞけた私だつた。

朧な月の光りと赤い放浪記よ
首にぐるぐる白い首卷をまいて
汽船を戀ひした私だつた。

一匹の蒼馬よ
おゝ私の視野から
今はあんなにも小さく消えかけた
蒼馬よ！

2.

古里の厩は遠く去つた

そして今は
父の顔
母の顔が
まざまざと浮んで來る
やつぱり私を愛してくれたのは古里の風景の中に
細々と生きてゐる老いたる父母と
古ぼけた厩の
老いた蒼馬だつた。

めまぐるしい騒音よみな去れッ
生長のない廢屋を圍む樹を縫つて
蒼馬と遊ぼふか！
豐かなノスタルジヤの中に……
馬鹿！　馬鹿！　馬鹿！
私は留置場の窓に
遠い厩の匂ひをかいだ。

―一九二八・二―

無駄の研究

――フーバーに依る

私たちの生活をふりかへつてみると、働きの上にも、金子を使ふ上にも、時間の上にも隨分と無駄なことをしてゐるのにあきれ返つてしまふ。次に掲げるのは、米國商務卿フーバーの「無駄」についての考察及び、調査から拜借したものであるが、私たちが自分を反省してみる上での參考としても、一通り目を通しておきたいものである。

×

大正八年に、フーバーが專門家に命じて調べあげたところに依ると、米國の六大工業(次の表の如し)に於て現在行はれてゐるところの無駄――即ちとり除くことの出來る無駄の割合は凡そ次のやうだといふのである。

(工業の名)	無駄の率
金屬工業	二九%
纖維工業	四九%
製靴工業	四一%
印刷業	五八%
建築業	五三%
製服業	六四%
平均	四九%

米國には、この六大工業の外にいろ〱な工業が行はれてゐることであるから、それらを加算して、優に二百五十億ドルの無駄が年々行はれてゐるだらうといふ。即ち、凡そ米國全體の工業製作品が年額五百億ドルと云ふのであるが、それだけのものに對して二百五十億ドル程の無駄が、現在行はれてゐるわけとなるのだ。

而も、米國民が一ヶ年に納めてゐる稅金の總額が六十億ドルであるから、工業界で行はれてゐる無駄の方が、稅金の總量よりもはるかに大きいことが判つたのである。

×

(一)例を靴の製造にとる。(レーガル製靴會社)

在來の製品は{形――二五〇〇種 / 品質――上、中、下三種}

そのために凡そ七、五〇〇種の靴が必要であつた。それが無駄をはぶいて單一化を圖つた結果{形――一〇〇種 / 品質――一種}

ために、一〇〇種の靴でまにあふやうになつた。この無駄としてはぶいた割合は實に九八、%

なほ、單一化を行つたあとの成績は次のやうに、いろんな意味で良好である。

一、生產費が　三一%減じた
二、棚卸品　二六%減じた
三、販賣價格　二七%引下げた
四、生產費　五〇%增した
五、賣上げ{女靴　二二%增した / 男靴　八〇%增した。}

(二)煉瓦

製造種類が六十六種あつた{十一種―全需要の八二% / 五十五種――同　一八%}

これを一九二一年六月全國煉瓦製造業者大會で十一種に限定する事を申合せた。

一年の後、成績が非常にいゝので、更に七種に限定した。

一九二三年の大會では、更に一種を減じて六種にしてしまつた。

×

これらの統計の結果、無駄とは何を指してゐるか、ほゞ明らかになつたと思ふが、もう一度、フーバー自身について聞かう。

彼は次のやうに云ふ、無駄とは、――

一、不意の好況時代の出現に伴うて、必然的におそつて來るところの不景氣がもたらす失業、破産、などから來る損害。

二、季節物としての農産物が、多く出來すぎたり（過剰生産）多く分配しすぎたり（過剰分配）した結果から來る損害。

三、國家又は國際的生産と消費に關する豫備知識がなかつたところから、工業生産品を無暗と拵へすぎたり餘計に分配しすぎたりした結果から來る損害。

四、そこいらに販賣されてゐるいろんな商品の、名稱、大きさ、品質、形、などに種類が多すぎて、統一されてゐないために來る直接及び間接な損害。

五、商取引をする場合の條件や、契約や見積書等が、各人各樣で統一が少しもないことから來る損害。

六、商品の破損から來る損害。

七、交通、運輸機關の不足、それに惡い取扱ひをすること等から來る損害。

八、腐り易い商品の生産にあたつて、これを調節するに足るやうな市場が不足してゐるところから來る損害。

九、販賣制度があまりに複雜になつてゐて、中間商人もまことに多く、そのために商品をねかしておく（死藏）こと資本を遊ばしておくこと等のために來る損害。

十、營業をする上に必要な基礎的な知識が不十分な者が無茶苦茶な競爭をするために資本を濫費することから來る損害。

十一、不正商人や、投機師が一般に與へる損害。

十二、天災に對しての準備が未だ充分に出來てないところから蒙らねばならぬ損害。

×

さうして、無駄を除く方法として、

一、統計並びに係數を確定すること、それを利用すること、

二、商品を單一化することと標準化すること、

三、商取引を單一化することと標準化すること、

四、不當の競爭をやめるやうにすること、

さうして單一化標準化の利益は、

一、固定資本が少なくてすむ。

イ、原料、製品の在庫手持品が少くてすむ、

ロ、機械器具の數がすくなくてすむ、

ハ、工場、倉庫を縮少できる。

二、生産品の増加

イ、同一仕事の延べ時間が増す。

ロ、設計が簡單ですむ。

ハ、無駄仕事がぐつと減る。

三、生産能率の増加

イ、作業が繼續的になるから熟練し易く、從つて仕上高が増し、技術もよくなる。

ロ、奬勵作用をなし易い。

四、販賣能率の増進、

イ、商品の受渡しが簡明、迅速になる。

ロ、國内及び國際的にひろく一般生産品の標準が知られるから取引がたやすくなる。

ハ、商品を買ふとき、品質、實用價値、値段に對して容易に比較決定できるやうになる。

ニ、名稱と品質が統一される結果中間商人の不正が出來にくくなる。

五、生産費、事務所費、廣告費などがぐつと少なくなるから、價格が下る。

六、國民全體の勞働力の浪費を節約できるやうになる。　（やま子抄記）

無産階級と所謂「勤儉貯蓄」（下）

辰巳經世

四　勤儉貯蓄のお太鼓の第二の音色

直接又は間接に、有産階級の利害を代表する企業家が、その唯一の目的である利潤を最も大ならしめるための方法は、一面生産額を最も大ならしめ、他面生産費を最も小ならしめるために努力する以外に出でないこと、並に第一の努力の現れが言ひ換へれば、最も代表的な有産階級的要求の現れの一つが、働き過ぎて而も喰ひ兼ねてゐる無産勞働階級に向つて「勤勉なれ、勤勉なれ、勤勉なれ」と呼びかける、音色美しいお太鼓の第一の響であるといふことを、前稿で述べて置いた。所謂「勤儉貯蓄」の第二の音色からは、然らば如何なる内容が聽き取り得られるかを吟味するために、私は、企業家たちが彼らの利潤の最大を期せんがための今一つの努力、即ち生産費縮小のための努力の現實曝露を試みなければならぬ。

所謂生産費を極く大ざつぱに二つの部分に分けることができる。一つは工場、機械、原料、補助原料等に費される部分で他は勞働者に勞賃として支拂はれる部分である。マルクスが不變資本と呼んでゐるところのものが大體前者で、可變資本と呼んでゐるところの、そしてそれのみが資本家に剰餘價値を齎すものとしてゐるところの部分が後者である。勿論ここで私は、難かしいマルクスの學説の説明を試みやうとするものではないが、私自身の言ひ方を以てしても、大體に於て

結論に變りは見受けられない。兎もあれ、企業家がその利潤をできるだけ大ならしめるために縮小すべき、若くはし得べき部分は右の生産費の中のどの部分であるかが、ここには問題である。

第一の部分に就て見るならば、工場や、機械や、原料に要する費用を縮めるならば、勿論生産費が縮まることは判り切つてゐる。けれども、彼らに取つては、生産費の縮小そのことが目的ではない、かくして利潤を大ならしめることが目的である。この目的のためには、生産額の問題を考慮外に置くことは絶對にできないのである。生産費の縮小と共に生産額も亦比例的に縮小するやうでは何にもならぬ、勿論賢明すぎる程賢明な、選ばれたる階級の代表者である企業家たちが、そんなヘマな疲びれ儲けをするやうなことは斷じてある筈がない。即ち、生産費の中には、それの加減が直ぐ生産額に比例的に影響する部分とさうでない部分とがある。換言すれば一定の結果を擧げるためには、是非一定のものを必要とするところの、彈力性若くは融通性を缺く部分と、さうでなくて可なりにこの彈力性を有する部分とがあるのである。而して右に擧げた第一の部分、マルクスの所謂不變資本、即ち工場機械、原料、補助原料等に費すものが前者であることは說明を必要としないだけに判り切つた事實である。要するに、生産費中のこの種の部分の縮小に依つては、より多くの利潤の獲得といふ彼らの唯一の眞の目的は絶對に達成されないのである。

生産費中の第二の部分、マルクスの所謂可變資本、即ち勞賃として支拂はるる部分に就てはどうであるか。この部分のみが生産結果に大した影響を與へることなしに、可なりの程度に縮小し得べき彈力性、若くは融通性を有つて居る、即ち企業家たちが凡ゆる努力をこの勞賃の低下のため拂つてゐる所以である。これらの努力若くは要求は、常に二種の形相に於て現れる、一は直接的な、露骨な「勞賃値下げの斷行」に於てであり、他は間接的な非常に巧妙に變裝せる形に於てである。而して前者に在つては、彼らが日頃誇してゐる溫情主義の旗旆の手前、そして何よりも組織的な近代勞働者の團體的な反抗に對する恐れから、流石の企業家たちに依つても、動もすると躊躇せられる。ただ後者のみは、非常に美いし表裝を有つてゐるが故に、何時でも、何處ででも、極めて大ビラに、「お前たちの身のためだぞ」と恩に着せながら、斷行し

得るのである。かくて前者の値下方法は切迫つまつた時の「取つて置き」とし、後者の方法を、鳴物賑はしく、不斷に實行して居る。」後者、それは「儉約せよ」といふ「勤儉貯蓄」第二の晉で色ある。

暫らく「勞賃」を中心として、ブルジョア經濟學者が、親切にも、證明し、詳說して呉れてゐるところの、そして私たちの見地からしても眞實であるところの、二三の所謂「經濟法則」を拜借しやう。資本主義社會では、勞働も亦一般商品の價格と同樣、勞働市場に於ける需要供給の關係に基いて上下する。然しながら常に大波小波の起伏する海面に、水平面といふものの存在が考へらるる如く、需給關係に基いて時々に上下に運動を續けてゐる勞賃に就ても、經濟學者はその中央部を一貫する一つの線、平均勞賃とでもいふべきものの存在を認めて、これを正常勞賃と名づけてゐる。而してこの正常勞賃を決定するところのものは何か。經濟學者は言ふ、そは勞働階級の標準生活費であると、そして私共の見地を以てしても、如何にもその通りである。そこで彼らの結論をその儘すつかり拜借することに依つて、私共は、勞働階級の生活標準が一般に高くなれば、平均的な勞賃は高くなり、反對に勞働階級の生活標準が低くなれば、平均的な勞賃は低くなるといふ事實を知ることができるのである。從つて、企業家たちが紳士らしくないと思はれはしまいかといふ懸念や、勞働團體の强力な反對の危險を忍んでまでも、露骨に、直接の「勞賃値下げ」を斷行しなくても、この勞働階級の生活標準を低める方法をさへ講じたならば、安全にして、而も同一の效果を期待し得るのである。

「儉約せよ、それはお前たちの身のためである、そしてお國のためである、「肉を喰ふな」「酒を飲むな」、「高い煙草を吸ふな」といふ御親切なお奬めが、酒池肉林に贅を盡し、高價な輸入煙草の薫のよい煙を傲然と邊かまはず吐き散してゐるお豪い階級の人々や、その代辯者たちから、厭や應なしに切り詰めた生活を餘儀なくされて、營養不良でフラ〳〵してゐる無產勞働階級に向つて、耳鳴する程ひつきりなしに下つて來る理由がかくして判つきりとわかつて來る。私がてうど本稿を書いてゐるこの日（三月十一日）、私の家の入口に投込まれた「勤儉貯蓄週間何とか」の、町役場からの刷物が、折からの雨のしぶきにたたかれてゐるのが眼に着いた。何といふ皮肉であらう。こりずまに、又お太皷が鳴つてゐるのだ。

五　勤儉貯蓄のお太鼓の第三の音色

今や私共は、お太鼓の最後の音色を聽きわけなければならぬ段取になつた。最後の音色それは「貯蓄の奬め」である。貯蓄といふことは、若しそれが可能であるならば、如何なる階級に取つても望ましいことであり、して良いことである。殊に何らの恒產なく、而も常に失業の危險に脅かされてゐる無產勞働階級に取つては、是非しなければならぬ必要事ですらあると言へる。だが彼らはどこにそれをなすだけの餘裕があるか。日々働いて得るだけの勞賃を、草を嚙み、水をすすり、裸體で露天に住みながら——假りにさういふことが可能であるとして——一文も費はないで貯蓄したとしても、果して何程の額が蓄積され得やう。而も彼らは、霞を吸ふて活きて行ける仙人ではない。どんなに切り詰めても、彼らの得るだけの收入は、自分及び家族の最低限度の生活をすらうるほし兼ねてゐるのが明かな現實ではないか。よしそれらの生活費の中から、バットの代りに胡蝶を吸ひ、週に一回の魚類も漬物で濟ますことに依つて、ほんの何程かづつでも貯蓄の資をしぼり出し得たにしても、それだけで不時の病氣の手當のためにどれだけ役に立て得るか、失業時の保證としてどれだけ役に立て得るか。無產者であればあるだけ、誰でも貯蓄の必要を痛切に感ずるのである。お豪い階級の人々のお奬めなど俟つ必要がない。問題は、それが可能か不可能かといふことである。そして、絕對に必要とすら痛感してゐる、その貯蓄の餘地がないといふのが明かな現實である。

勿論、有產階級やその代辯者たちが、この事實に盲目である筈はない。而も彼らは、何故この無產階級に一錢二錢の貯蓄貯金をすら强ひやうとするのか。お太鼓の最後の音色は次のやうに響いて來る。「塵も積れば山となる」と、大小の所謂敎育家が十年一日の如く敎へ續ける、そして如何にもその通りである。一を一億倍すれば一億になり、一錢を百億倍すれば一億圓になる。それは初等數學が敎へて吳れてゐる。一人の無產勞働者が、胡蝶をバットに代へてしぼり出した一錢、鹽鮭の代りを漬物で濟して出て來た一錢、それを一々切手に代へて臺紙へ張りつけること、を百億回も繰り返せば一億圓といふやうな尨大な金額になることは僞でない。然し一人の人間が、五十年の間毎日それを繰り返したとしても、塵の集

積はとても山になりさうにないことを、矢張り初等數學が教へて與れてゐる。だが日本全國に幾百萬、幾千萬を以て數へる無産勞働大衆が居る。これらの人々が、皆今言つたやうなことを繰返したならば、そしてその全部を集めたならば、私は決して疑はない、勿論それは恐ろしい大きなお金の山になるといふことを。「塵も積れば山となる」といふことは、この事實を指すのである。個々の勞働者が辛ふじてしぼり出した一錢二錢が、丹念に貯金臺紙に張られて行つても、到底彼自身の失業や不時の病氣の際の保證に役立たないことは前述の通りである。ただかういふ零細の金が、全國各地の無産者から、幾百萬、幾千萬の無産者から、郵便局を經て中央金融機關にかき集められた時、それは山のやゝな巨額となつて現れる。そしてこの巨額から、平時は企業家たちに、無産勞働階級から更に新な剰餘價値を搾り取るための資金を、極めて低利で貸しつけてゐるのである。そしてこの巨額から、一朝事ある時には、つぶれかけた銀行に、どし／＼とつぎ込むことに依つて、この銀行と、それと特殊の利害關係を有する少數の大企業家とを、彼らの破綻から救ふのである。無産階級の血と汗との滴りが、かくの如く有産階級をうるほす大池となり、前者の儉約の結晶が、積まれて山となつて、後者の支配的地位をがつしりと支へるところの基礎となる。ここに「塵も積れば山となる」といふ、貯蓄奬勵の美しいお太鼓音の色の包む神秘があるのである。

尙ほ一つ無産階級と貯蓄との關係に關する、極て判り切つた――而も一般には餘り注意されてゐない事實を附け加へて置きたい。それは預金利率と貨幣價値との關係である。一般に無産者に取つて可能なる唯一の預金方法は郵便貯金である（その金額が極めて零細であるが故に）而してこの郵便貯金はその利率が最も低率であることを特徴とする。それでも兎に角利子がついて行くのであるから金額は絶對的には何程かづつ殖へて行く。ただ一方貨幣の價値が下つて行く事實を看過してはならぬ。二十年前の一圓では、一斗の米が買へた。今日の同じ一圓では、三升の米を買ふことも困難である。年々蚊の涙ほどの利子が預金に加されて行く。だが年々遙かにそれ以上の割合で、貨幣の價値が下落して行く。即ち相對的には預金額が、事實上少しも増加して行かない許りでなく、却つて減少してさへ行くのである。「お前たち身のためだ」と親切に教へて與れる預金は、預金者には上述のやうな合はぬ算盤勘定を齎し、その奬め手には、濡れ手に粟のボロいふところ具合を齎すのだ。種々の努力がこの方面に向けられるのも、成程成程とうなづかれる。



結婚と離婚の登録（ロシア）

上　希望に輝いた新夫婦と
下　分れ話に暗い顔の人達



製糸女工の生活

廣岡延夫

この原稿は徹頭徹尾內務省社會局の調査によつたものである。而も官權の調査によつてすら尚且つ我々は多くの矛盾を讀み取ることが出來るといふのがこの一文の味噌である。

現在日本の製糸女工の總數は二十八萬人、その八割は十五歳から二十四五歳までの母性として最も健康なるべき人達である。而もこの健康そのものであつた田舍娘が女工として出稼するや、數年ならずして全く憔悴した姿となつて歸郷することは殆ど當然の如くなつてゐる。卽ち富山縣の調査によれば歸郷女工五、四九七人中檢診して疾病者と認めた者が四五五人で全體の八・二八に%當つてゐる。疾病の種類は最も多いのが呼吸器病の一一五人、之に次ぐのが全身病の九三人、肺結核の八一人、その他が四〇人で結核性疾患の者を集めて見ると一二一人あり、全疾病者の約二七%を占めてゐる。そして內務省社會局も、女工總數の五%乃至一〇%の罹病者があり年々罹病率が高まつて行く事を認めてゐる。

一體彼女らの勞働時間は何程か。大正五年工場法が施行せらるゝ前は、一日十六時間を超えることは稀ではなかつた。然らば工場法實施後は一般保護職工と同樣十二時間を限度としてゐるかといふに、製糸業だけは特別である。昭和六年までは十三時間でも構はぬことになつてゐる。それは製糸業は我國産業の大本だからださうである。それからも一つ見逃すことの出來ないのは同法の第八條にある除外例である。卽ちその第三項によつて、

「臨時必要ある場合」

は十二歳未滿の女工の就業時間を二時間以內延長することが出來る。そして同じ第四項では「季節工業」はその繁忙な

る期間だけ一年二十日の割合で一時間だけ延長し得ることを認めてゐる。そして製糸業は特に一年六十日間を延長することが出來るようになつてゐる。彼女等は曉明汽笛の合圖と共に起床することになつてゐるが、製糸工場附近に住んでゐる人らは言つてゐる。製糸場の汽笛が聞えるから夜が明けたであらう、女工が歸つたから今夜は最早遲いと。即ち晨に星を頂き、夕に月を踏んで働いてゐるのが女工の一日である。その間僅に二回の休憩が與へられてゐる。晝食後の三十分と午後三時頃のオヤツの時間と。そのオヤツは多く握飯で、これに要する時間は出來るだけ短縮せられ、殆ど休憩して喫食するを許されない形である。桂視察官の言によれば『休憩ともつかず、さりとて作業ともつかず、多くは臺についた儘之を食す』と。そこで彼女らの勞働はそんな調子でやつてもいゝ程簡易なものかといふに中々さうでない。優良なる生糸を製する爲には女工は幾多の鍛錬を經て、作業中も絶えず精神を指頭に集注して居らなければならない。その上女工の背後には罰點制度がひかえてゐる、若し繰糸が不良であれば彼女らは賃銀をひかれねばならないのだ。その間の消息を語つてゐる社會局調査の一文を次に掲げて見よう。

『女工の勞働時間は他工業に比して最も長く、その間に於ける休憩時間は短く、且つ、作業中の成績は賞罰制度に依りて監視せらるゝ結果、取得する賃銀は他工業に於けるよりも反つて低い。一週間又は、一ケ月の成績を工場毎に調査して優勝旗を與へることになつてゐるが、午前午後の二回に渡つて繰糸成績が讀み上げられる時には女工らは非常な緊張を示すものである。そして一度得た優勝旗が他工場に奪取せられたとすれば、誰の成績のためかを詮議し、その不成績者に對してはあらゆる迫害を加へる。その不良成績者たる女工は非常な煩悶をする。その小さき女性の胸は惑亂し遂には肉體的に精神的に、破滅するに至つたといふ例は多々あるのである。』そしてその檢査たるや公平に檢定することがむづかしい。こゝに檢査男をして乘ぜしめる機會をつくる。次にかゝげる工場うたは女工の生活を最も端的に物語つてゐる。

×

一、今年やうれしい帳場の妾(わたし)糸目きれても苦にならぬ

一、ほんにわたしは屑糸ひいて申譯なや旦那さま、

一、三度々々菜葉を食べて何で糸目が出るものか

一、申しやさしい見番さまよどうぞいと夜のお情に

一、板になりたい帳場の板になつて手紙の中見たい。
一、ほんに憂世ぢや製糸の女子こんな子を産んだ親見たい
一、丹波綾部の郡是製紙娘やらずに繭を賣れ

柔順なる女奴隷をしてかく叫ばしめたものは何か。前四つは主として操糸に關係したものであり、丹波綾部の郡是製糸工場斯界に勇躍してゐるものである。

かく罰點制度に左右しられてゐる女工の賃銀は常に一定してゐない。長野縣の調査によれば、最高が一圓二十三錢、最低が二十二錢、平均六十九錢二厘を示してゐる。彼女等の寄宿舍生活はどうか。

先づ食物から始める。諸君はかの信州岡谷の製糸女工のストライキが、僅かに飯場の改良を目標にしてゐたのを知つてゐるであらう。長野縣當局の調査によれば、調査工場六百四十九ケ所の內、魚肉を毎日支給する工場は僅に四ケ所、隔日に支給するのが九十五ケ所、中には一ト月に只一遍出す所、一回も出さない所もある。

彼女等は月二回の休日を何に使つてゐるか。實にその最大の誘惑は食物である。彼女等は失はれた營養をその一日で取戻さうとしてゐるのだ。こゝでも赤澤視察官の言を引かう。

「私娼婦の調査せるものに因れば女工上りが最も永く勤むると云ふ、その原因は食物にあり、而して性慾が最も强い」と食事の方法は食堂が狹いから交代でするようになつており、その姿勢は多く立食である。それは食事後の休憩時間の僅少若は絕無と共に胃腸病患者の激增を來すものである。卽ち全職工の二七%乃至三〇%はそれにかゝつてゐる。

次に寄宿舍そのものに就て調べて見よう。

一、雨戶、寄宿舍數の五十九%は雨戶がない。
一、天井、同じく五〇は%天井がない。
一、煖房裝置同じく七九%はこれがない。
一、布團、多くは掛及敷布團一枚づゝである。之等は酷寒なる信州の調査である點にお目とめを願ひ度い。
一、寢室の廣さ、一人當り疊一枚乃至二枚の所に起臥してゐる。
一、押入、寄宿舍の六八%はこれがない。
一、鏡臺、その七七%は備付けてない。
一、浴場、その三分の二は男女共用であつて上り湯、桶等は極めて不完全である。
一、照明、は多くは疊一枚に就き一燭光である。

倘作業中の照明の不足のため女工の一〇%は近視眼であるそして職業病として、手指燋疹（水虫、繭カブレ）に女工の全部が犯されてゐることはよく人の知る所である。このたゞれたる指頭より生み出される金額は實に八億八百八十三萬五千圓、正に本邦輸出總額の四五%に當る。この我國產業の大本は實に女工の勞働を無視しては成立しないのである。

生活のひまに

田邊一子

心より客と思へぬ片言の幼子にわが菓子を商ふ

皮肉言ひ合ひなどしつつゐていとしみ合はむ心もあらず

ふる雪を横にながめて坐り居りいかなる事かを思はむとして

しかすがに物思ひ得て顔やせし我と思へばさびしくもあらず

胸のうちに憧れ宿しすなほにも日夜ある我と一人し思ふ

心のみ燃えつつあれど手はふれず言にも我は言ふと思はぬ

古郷の林の奥の墓のうちになきがら埋めし祖父在りと思ふ

かくばかり努めつつ世に在る我を祖父の忘れてある筈はなし

美しき花見する樹を何思ひ生前の祖父の伐り捨てにけむ

植物の心

朝早く露をふんで庭に下り立つてみると、きのふまで見なかつた若葉が、はや一枚梢のさきに軟くのびてゐる。硬い〳〵實がいつの間にかふんわりと綻ろんで、もの云ひたげである。

大自然の美しくもの靜かなことなどまるで忘れて、幾日も空もみ上げないやうな暮しを餘儀なくされてゐる私たちだつて、時に、しみ〴〵とした心で驚異すべき大自然のふところ深く抱きこまれてみたいねがいをひそかに希ふ瞬間がある。驚異すべき大自然界の不可思議!

植物は、一ヶ所にぢつと固着してゐて運動をすることもないし、刻々に伸びたり茂つたりして生長してゐるのも、人間の目には見えない程の速度であるからちよつと氣がつかない。又、虐待を加へられても、親切に愛撫されても一向それに對して反應して來ることもない。どちらが頭やら尻やら分らぬほどの下等動物の虫でも、踏まれゝば、身を縮めるなり反らすなりの反撥作用はするものであるのに植物に於ては、それさへないので植物に感覺がないと思つてゐる人が多い。

然しこれは、植物に感覺がないのではなくて、却つて我々の觀察が足りないから判らないのである。實際には植物は、生物として立派に運動もしてゐるし、感覺を持つてゐるし、もつと複雜な適用作用や反應作用をも具備してゐるものである。もし植物のもの靜かな反應の現れるときまで心靜かにぢつと見てゐるだけの親切と忍耐をわれ〳〵が持つたならば、植物に運動や感覺があることをよく判つて來る。

もしわれ〳〵が自然の愛兒である植物にもつと親しんで、ぢつと氣永に待つてゐるならば、その葉その枝、その實、その花が、はきつりと次のやうに囁くだろうと思ふ。

『わたしたちと、動物であるあなた方と、ともに同じ性質を分けた姉妹であります、あなた方だつて、曾ては一度今の私たちと同じやうな生涯を送つたものです』と。

即ちわれ〳〵は知る。植物の花や葉や莖や根に流れてゐるあるいのち――生命、力、法則――それは人間にも、他の動物にもいやしくも生物といふ生物のすべての中に洽ねく流れて働いてゐるそれと同じものであるといふ事を。そしてこれが進歩して、人間に於てはやがて自覺になつてゐるといふ事を。

一體、人間としてのわれ〳〵は、この二つの眼に映り、二つの耳に聞き、舌に味ひ、手に觸れ、鼻に嗅ぐ世界をそのまゝ世界だと信じてゐる、

然しこれは、たゞ、人間の感覺に映つて來た世界であるといふだけで世界の實體が必らずしもさうだと云ひ切り得るものでは決してない。人間に、世界がさう見える、さう考へられるといふだけであつて、或ひは、この同じ世界を、全く別な觀方でみてゐるものがないとは限らぬ。これは一人々々の人間についても同じことで、世界はつでも、その世界の觀方は人おの〳〵に依つて多少、違つてゐるといふ方が妥當であるのである。

普通の人のみた世界と色盲のみた世界とは、

少くとも色彩の點から云つて隨分と異ふ。從つて、目のない動物には、世界は色の區別をもたぬ世界であろうし、耳のない動物には、世界は音のない世界であるであろう。これも各々一つの世界觀であつて、色もあり、香もあり、と思ふ人間の世界觀とても、又一つの世界觀だといふまでである。

そこで、植物も植物なりの世界觀を持つてゐる筈である、人間が、この世界をあゝだ、かうだと觀てゐるその考へは全く主觀的なものであつて、人間といふ、特殊の感覺器官に映つた世界で、それがあるまでである。從つて、人間とはまるで異つた特殊の感覺器官をそなへてゐる植物には、世界は又それだけ異つて映る筈である。

十數年前にフキンランドの學者エルヴイングは、植物は、金屬のある方角に向つて生長するといつて、一時喧しい議論となつたことがある。レントゲン光線の發見やその他いろ〳〵の光線に關する學問が進歩した今日では、金屬はたえず一種の力を放射してゐるといふ事が明かになつてゐる。そして空氣の中にも、水の中にも、地殼の表面にも、おそらく宇宙間到るところにこの金屬から吐き出す力がみちみちてゐて、植物がこれに感應することも明らかとなつたのである。

なほ、人間が感覺せぬことを植物が感覺する實例も決して尠くない。夜になつて、花が花瓣を閉ぢて眠るのは、あれは一つには露を防ぐためだといはれてゐるが、又一つには、夜の寒氣を防ぐためである。而も單にそれだけではなく、三色菫の花は、夜になると萎れたやうに頭を垂れるが、而もこれは每晩同じではなくて、今夜はきつと冷えるといふやうな晩に限られてゐるといふのである。植物はすなはち、斯ういふやうに數時間後の寒い變いをも感得するのである。

それから、植物は、自分の身體の形をよくわきまへてゐる。草や木の枝なり、葉なりを人間の力でわざと曲げておくと、自然に、元の形に復する事實を人々は知つてゐるだろう。植物には種屬に依つておの〳〵特殊な木振り、葉振りを備へ、葉の形、葉柄の長さに至るまでもみなそれ〳〵の標準に從つてゐるものなので、從つて、時に、ねぢけた葉や伸びすぎた葉柄などが出來た場合には、標本的の形なり位置なりを恢復するために隨分つとめることがよく判る。人間にも、指が並み外れて短い人や、足のねぢくれた者が澤山あるが、然し、精神の働きで人間としての標準の形にまで直すといふわけにはゆかぬ。植物にそなはつてゐる一種のこの能力が、人間には備つてゐないわけである。或ひは、備つてあるとしても、人間は未だこれを感知することが出來ないのであるかも知れないが。

購讀者三倍加のため御助力を乞ふ

婦人雜誌が益々俗惡に墮落して來たので、心ある人は皆、たゞ賣れさへすればいゝんだといふ風なあゝいふやり方に義憤してゐます。

本誌をもつと〳〵いゝ雜誌にして、まじめな婦人にみな讀んでほしい。

どうぞ購讀者を一人でも紹介して下さい。來月號から書店でも賣りますが直接取引の方が大分安いし、私共が書店に口錢をとられずにすむ。それに、時々通信をさしあげられるので共助かりなのです。

紙鳶の自慢

イワン・クルイロフ

はれたみ空に、たこが上つてゐました。強いきたかぜの背にのつて、たこは、たかく／＼天まであがつてゆきました。

「たかいな、たかいな。もうぢき、雲の上まで上つてしまうぞ」

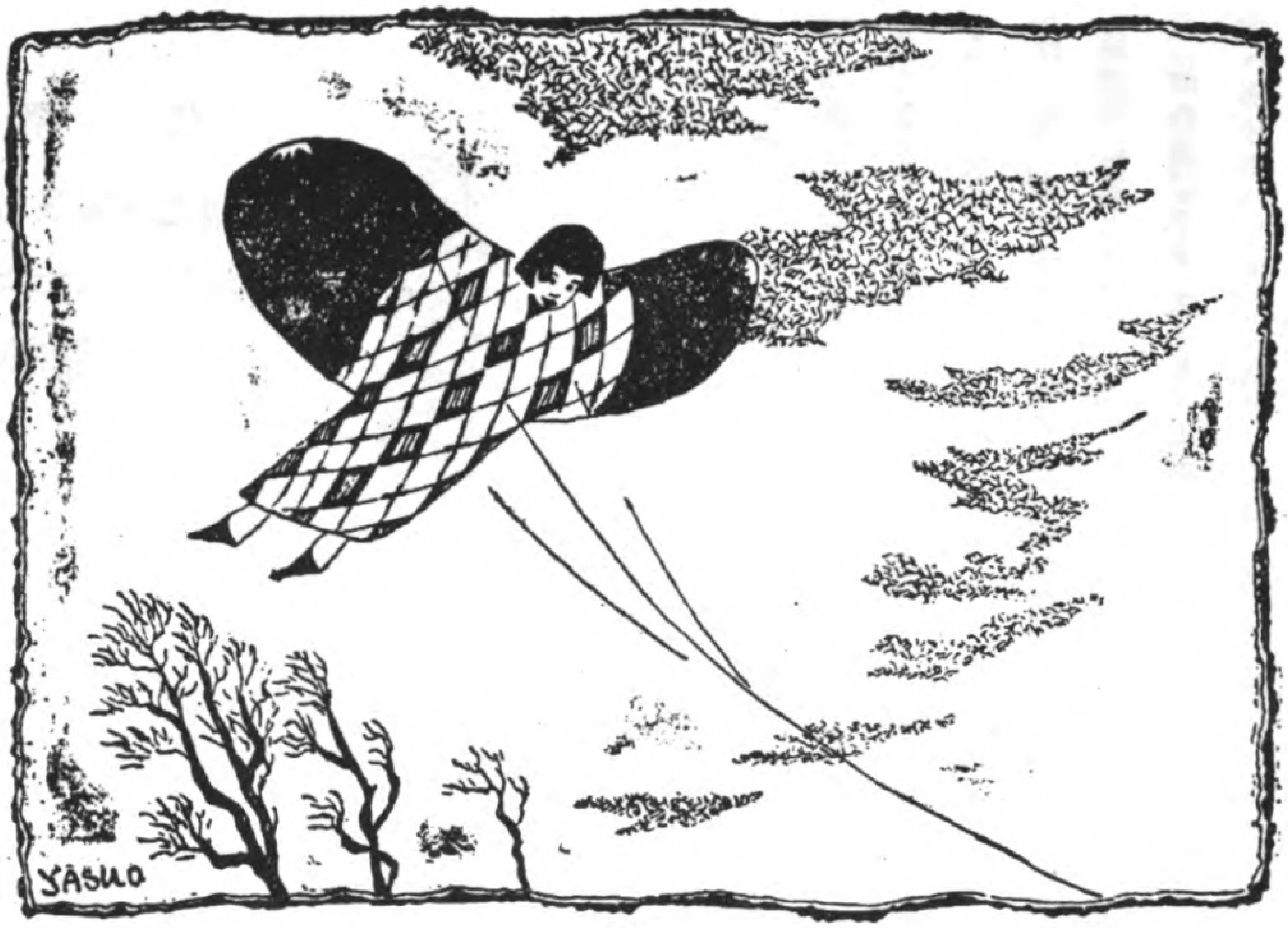
と、たこはとくゐになつて、目の下のせかいをみおろしながらゐばりました。

すると、ちやうど、ずつと下の下のとほくの谷間のおくに、白いちようちよが一ぴきシラ／＼ととんでゐるのがみえました。

それをみつけてたこは、

「なんだ、ちようちよさんか。こゝからみると、あんまり





お前さんが小さくつて、まるで、ごみくづがとんでゐるやうだよ。

どうだい、お前さんも、こんなやうにしてたかく〳〵天までとんでみたいだらうな」

つて云ひました。

するとちようちよは、ツンとすましたもので、

「なんのわたし、ちつともうらやましかないわ。いくらたかくとべたからつて、たこさん、あなたは糸につながれてとんでゐるんぢやないの。

それにくらべたら、わたしなんか自由よ。ひくくつたつて、じぶんのおもふまゝにどこへでもとんでゆけるんだもの。わたしたちの方が、どれだけ自由でしあはせだかしれないわ」

とこたへました

原作 ラヨス・ビロ

映畫物語

最後の命令

梗概

『老將軍』といふ名前が、イヤだ。けれども原名なら立派に闘える。『最後の命令。』そして革命を取扱つた愛國者の悲劇で、見てゐて充奮させる。何と云つても主演者エミール、ヤニングスの素晴らしさ、監督スタンバーグの偉さが光つて見える。スタンバーグは『救ひを求める人々』から、『暗黒街』へ行つて、終に此の『老將軍』に達した。

原作者はラヨス、ビロと云ふ人。それでは其の筋は……?

×

歐洲戰爭中のロシア！　地上數吋の土地を爭つて、國民の膏血は流されてゐる時、ザアは今閱兵式を催してゐる。見渡す限り雪の野原である。兵士は銃劍を捧げたまゝ凍りついてゐる。其處へ、ザアと將軍とは、温い自動車から降りて、威風四邊を拂つて歩いて來る。厚い外套、營養に富む肉體の將軍……と傷ましく凍りついた兵士との對照！

閱兵式を馬車の上から見下ろしてゐる蒼ざめた靑年と美人とがゐる。將軍は二人を見つけて詰るのである。其の會話。……

『國難の際、貴樣は何故軍人にならないんだ』

『私は肺が弱いものですから。』

『噓つけ、弱いのは肺ぢやなくて勇氣だらう?』

『命令して、他人を戰線や、死に送るのに勇氣はいりませんからね。』

痛烈な一言に、將軍は啞然とする、が、ハツと氣を取直して、鞭でピシリと靑年を打つ。血が頰を流れる。美人は靑年を介抱する。

『此の男は何者ぢや?』

『キエフ劇場の舞臺監督です。私は其處の女優……なのです。』

將軍の眼には、美人の眼ざしが眩しかつた。

×

將軍を乘せた列車はモスコーを去つて、遠く戰線に向ふべく、雪の夜を衝いて走つてゐた。突如、汽車が停車したので、四邊を見渡してみると、革命家に取卷かれてゐる。

將軍を見た群集は、雪崩のやうに將軍に殺到して、毆つたり蹴つたり、散々に辱かしめる。將軍は始めて、部下なくして無力な自分自身を發見した。やがて、征服された將軍は、火夫になれと吩つかる。汽車は再び動き出す。然し、將軍は隙を覗つて汽車から脫出した。そして、ロシアを去つてアメリカへ亡命するのであつた。(此の前後、日本では檢閲の際カットされる幾多革命の場面が素晴らしい。結社を襲ふ憲兵、群衆を狙擊する軍隊、演說に熱狂する民衆！ 倒れても〱後から〱とつゞく革命家の群等の場面の如何に凄然たる事よ。)

×

アメリカに亡命した將軍の生活は辛酸を極めた。彼は終に、加州ホリウッドの一映畫會社の臨時雇に應募した。

『今度ロシア革命の映畫を作るので、將軍の役が一人欲しいんだ！』

將軍は、偶然にも將軍の役を振られる事になつた。やがて命ぜらるゝ儘に身に纏はせられた軍服は――、今は思出多き昔のロシアの軍服ではないか。將軍は嬉しいと思つた、が、それは束の間革命の當時、自分が迫害せられた思出がマザ〱と眼前に展開して來る。將軍は我れ知らず慄然として戰いた。

『將軍！』

呼ばれて氣がつけば、自分の前には其の映畫の監督が立つてゐた。その監督こそは、過ぐる年、閲兵式の際自分に鞭うたれたキエフ劇場の一監督……。監督は徐ろに云ふ。

『同じ服……同じ軍服、それに同じ人間だが、時勢は移つた。』

何んと冷たく聞えた其の言葉よ！ 將軍は今、時勢に見捨てられて、人に命令される身の上と變り果てた。自分のやつた事は、そんなに惡い事だつたのかしら、此の男たちの云ふ事が、正しい事なのであらうか、凡ては將軍には不可解の謎であつた。

『オイ、將軍！ 俺の云ふ通りしろ！』

監督の聲は、平生と少しも變らなかつた。けれども聞く身にとつては、命令と云ふものの如何に恐ろしいかゞ沁々と分つた。

『將軍だ！ 俺は將軍だ！』

我れと吾が胸に叫び乍ら、將軍は慄へ戰く。さうして遂に發狂して了つた。――(終)

二歳の惠坊の生活

平田のぶ

△

淑ちやんのお下りの、大人の指ほどもあるクレヨンは惠坊の大事なものの一つである。

「クレ！　クレ！」

彼はそのクレで、來たばかりの新聞の上にも、私のよみさしの本の上にも、障子にも襖にもガラスにも壁にも、土の上にも、かきなぐる。いや引きまわす。ぐちや〳〵した線を引き乍ら、キヤ〳〵とよろこぶ。色は綠もあれば、紫もある。黑、赤、オレンヂ、セピヤ、紙に手當り次第である。彼には別に色の好みもなく意欲もないらしい。只うつりさへすればよろこんでゐる。

△

それでも引くときは

「キチヤポー」

とか

「ジテンシヤ　テン〳〵」

などといひ乍ら、その擬音と拍子とに合せて線を引いて居る。繪といふよりも動作藝術といふよりも運動に近　ものである。それは丁度

「小ちやオートバイ　ブーブー（小さく弱く」

「大きいオートバイ　ブーブー（大きく強く額を赤め力みかへる）

あれと同じ表現である。

△

五六歳の子供の繪には、井戸の中の釣瓶がみえたり、家の裏側まで畫かれてゐ

戯詩佳人風景

陸鬼生

與謝野晶子

日輪のみち
極まりて
空いまし
灼熱の薔薇

あはれかの
薔薇去せぬ間に
いち早く
子供育てむ

三宅やす子

坊やのお守りは
山越えて
ぽてぽて太皷を
買うて來た

叩けど叩けど

るのをよくみるが、更に、動いてゐることさへ稀でない。

「今ね汽車がドン／＼走つてるでせう。おぢさんがおくれまいと思つて、驛へ走つてゐるのよ」

などいふ。空間的に立體的であるばかりでなく時間的に連續してゐる。繪畫と劇とを一緒にしたようなものだ。惠坊の今の繪はそこ迄ゝ行つてゐない。繪といふより多分に劇、形よりも動きを表現してゐる。子供が大人になる迄には、ほんとに、いろ／＼な段階を經るものだ。

うつかり急いで、大人の子供にしたくないものだ。

△

中學生の從兄が小さい頃とつてゐた。「コドモノクニ」を、納屋から引出して與へた。私は繪本丈から後てゐる都會の子供の空知を嫌がつてゐる。さうした敎育を受けて大人になつた都會人の薄つぺらさを嫌がつてゐる。物知りの賢い子になる前に、惠坊は、もつと／＼大事な生活、自然土を相手に、惠坊自身の生活をしなくてはならぬと思つてゐる。

繪本などいふものは子供になくてはならぬものとは思つてゐない。ことに自然に惠まれた惠坊には、なくてもいゝ位に思つてゐる。だが兄ちやんが折角呉れたのだし、惠坊も外で遊びあきるとこれをみてよろこぶし、雨の降る日などうるさくなくていゝ。この位の考へで放つておいたのだつたが、結果は、大變に私の苦勞を增した。それは彼が、

「これ何に？」

をやる事である。勿論それが面倒なといふわけではない（急ぎ原稿を書き乍らも何んとかかとかきつかけを作つては、惠坊の相手になりたい私だから……）又學校の先生だつた私に、惠坊の發問に答へられないといふほどの事もない。苦痛といふのは、空知を嫌がる、嫌がる以上に恐れる私の感情である。まだ一度もほんものと見た事もないライオン、ラクダ、ペリカンさんを只繪丈で敎へる事が、どうしても出來ないからである。先生丈あつて實物敎授かなど笑はないでほしい。

音の出ない
ぽてぽて太鼓で
寢んねしな

野上彌生子

頭のなかに
逞しい竹林がある

竹の根元で
子供らが
兩手と歡聲とを
擧げてゐる

花が咲いて實つて
もう枯れかゝつた
竹藪だ

柳原 白蓮

そのかみ
短檠の灯に黒髪を映じて
春宵千金の一刻を
人の世の運命に泣けり
引き抜きて早變りせば

私は、教育的に別に主義なんていふものはない主義などで子供を縛りつけては大變だと思つてゐる。人間教育は社會政策ではないから。只私は嫌なのである。空知が恐しいのである。その爲めに御苦勞にも、動物園まで御伴をやる事になる。これは貧しく暇のない母には、實際厄介な——勿論嬉しい厄介ではあるが——事に相違ない。

△

モンテソーリが工夫した恩物。砂、木片金屬と音を聞きわけさせて聽覺をぬり、いろ／＼な目の磨研紙をなでさせて觸覺を訓練し、大小樣々な形の錐で全覺を訓練しようといふような所謂教育的玩具を輕蔑してゐる。又商店で賣つてゐる幼兒のための教育玩具も嫌ひである。凡て教育成心を以つて作意された人工的なものは、一目的に完備し過ぎてゐる爲めに、全的に不完全であり從つて、それを高く評價し過ぎるために文明病的不具な子供になる恐れがある。

この意味に於て、惠坊丈は、どうか田舍で幼年期を送らせ度いと願つてゐる若草の感觸、日の光り、土の香、森の靜さ、小鳥の歌、何と自然は新鮮で單純ではないか。何もなかつた黑土の中から、小さい芽がぽつりとのぞいた。一夜のうちに櫻がさいた。若芽ぐむ、つくしが生える。蟻の行列が初まる。濃綠、紅葉、何と自然は極まりなく複雜ではないか。

なめらかな白楊の幹に口づけしても、別によろこびもせぬ。一冬中尋ねないでも森は怒りもせぬ。でも、水をおこたつた花鉢の草は枯れる。風がふけば森はざわめく。飽和を破れば勝手に雨をふらす何と自然は無愛想で自由ではないか。

買つたペリキのお皿はお皿にしか役立たぬ。然し、木の葉は、水に浮べて舟に土を盛るお皿に、切つておあしに、口にあてゝ笛に、細工にして草履に、心のまゝに千變萬化してくれる。何と自然は豐なことであらう。

最も無愛想、無關心、教育的成心の皆無な自然こそ、幼兒の爲めには最も豐かな、最も自然な、最も自由な新鮮な良教

夫婦共枕頭に酬を進めて
春宵無錢の一刻を
人の世の決定を乞へり

註、無錢は普普通に通ず。又無産
にも通ず。

中條百合子

これは露西亞製ビスケット
あゝ　ぽりぽりと
いつでも咽喉を乾かせる

いゝえ　これは獨逸パン
みかけによらぬ
いゝ粉です

平塚らいてう

原始女性は
禁斷の實を
もぎました

原始時代の
太陽は
靴下いろに
青ざめて

師である。
　教育的環境としての私も、此自然に見習ひたいと思ふ。教育的成心の爲めに、惠坊を歪ませたくない。然し母として、より文化人として忠實に細かに彼の生活をみつめたい。そして教育の目的と方法とを惠坊自身の生活のうちに發見したい教訓はおりのようなもの垢のようなものこれを引つけてやらないようにしたい。私の目、私の意見で惠坊が物を見、物を考へる事は恐しい。惠坊は、惠坊の目で心で物を見、味ひ考へてほしい。
　だが、同時に、隣人として、困る事は困る、嫌な事は嫌と端的に直情的にぶつけよう。そうすることによつて、自由人同志の共生の道を發見創造して行かう。

高知共働社訪問記

奥むめお

　高知共働社（消費組合）の招待をうけて、私は初めて四國の土を踏むことになつた。三月二十三日。ちやうど神戸で船に乘込むまでに半日の餘裕があつた、うそ寒い、淋しい日の午後一時頃、私は自働電話の中で、凡そ十三年振りに聞くなつかしい人の聲を胸をワク／＼させながら待つてゐる身であつた。
　まつ先きにたづねた神戸消費組合家庭會の幹事木村春代氏は、私の同窓の先輩である。當時頑な一女學生の私を蔭になりひなたになり庇ひ乍ら育くんで下さつた私の恩師、今は東と西に離れて同じ消費組合の仕事に精進する同志でもある。
　昔と同じやうな氣持になつて會ふとすぐ消費組合の仕事についていろ／＼と話がはづみ出した。十三年の階段をどう踏み越えて來たか、そんな憶ひ出ばなしを

原始女性は
泣いぢやくり
小鳥の巣を見て
をりました

新居格氏より

こないだ、新潮の婦人雜誌に對する批評漫談會に行つたのですが、實際に見ると、新聞廣告をみて考へてゐた以上にどれもこれも甚く俗惡、低級全くひどいですね。
　あゝいふ雜誌を、婦人はどんな顏をして讀んでゐるかと云ひたいやうです。或ひは低級な男子が餘計に買つてゐるのかもしれぬですが、とにかく、讀者を毒することがひどいでせう、
　それも、徹底的に營利本位だからです。まことしやかに、雜誌樂園だとか、本誌の理想だとか、書き立てゝゐるが、みな、賣れさへすればいゝんですからね。いかに編輯したら最も、多く儲けることが出來るかといふ儲け主義第一なんですからね。あゝいふ婦人雜誌に對して婦人が怒らないのは情けない。不買同

お互ひに今くり返すのもまだるい程、私たちはとつつきから消費組合の話であれもこれもと意見を云ひ合つたり、經驗を聞かせ合つたり、私としては、先輩神戸消費組合婦人の活動についていろ／＼なものを見せて頂いたりしてゐる内にすぐに時間がたつてしまつたのであつた。

　高知では、第一あの明るい南國の空が私を喜ばせた。何となしに、町全體が明るく、朗らかであつたこと！　桃櫻の花びらが、しつきりなしにちようど雪のやうに飛び散つてゐた頃で、私の一等好きな若葉の美しかつたことつたらない。

　それに新興のこゝの消費組合のために三十、四十、五十歳位の奥さん、おばさんたちが幾人も／＼熱心に共鳴して協力してゐられるのが、私に、涙が出るほど嬉しかつた。東京で、消費組合の仕事のために婦人の、もつと積極的な心添えを促すためにいろ／＼な計畫をたてゝ暇のない家庭婦人たちに集つて貰つたり、自分で戸別に訪ねて行つたり、手紙に書いたり、機關誌の上で話しかけたり、樣々のことをみんなでくり返し努めてゐるのも、かうした、高知で私が見たやうなしつかりした家庭婦人の協心協力が欲しいからに外ならぬ。然し今日では、これまで家庭の奥にかくれて、たゞ一家の妻として忠良な主婦振りを發揮してゐられるにすぎなかつた立派な婦人を、私は東京に於ても大分に數多くあちらこちらに見出すことが出來て嬉しく思つてゐる。

「組合員の中にこれだけ、かういふしつかりした家庭婦人が而も、組合を自分の店のやうな氣持で手助けてゐて下さつてゐる限りは、高知の消費組合は順風に帆をあげて進むやうなものであらう」と私に思はれた。

　何といつても地方は、東京のやうな持ち寄り世帶の都とは違つて因襲も強からうし、空氣も一體に重からうにわけて外へは出にくい家庭婦人の心が、そして、足が、よく、組合の仕事や、私の講演會にまであんなに熱心に向けられて來たことだ、私は、こんな問題に關聯して、高知の町についていろ／＼考へてみたりし

豊位起りさうなものですが。

　あなた方は「婦人運動」の存在の意義を大いに自認して、もつと一般の婦人にもすゝめられる樣に內容を軟かなものに改めて、どし／＼宣傳する必要があります。いはゆる婦人雜誌征伐の先導に立つて婦人界の啓蒙にあたる勇氣がないのですか。輿論があなた方の「婦人運動」の編輯方針にくみしてゐるのですしつかりいゝものを拵へあげて下さい。談

辰巳經世氏より

「無產階級といはゆる勤儉貯蓄」の題目の下に、書き添へたいと思ふ、書き添へなければならぬとすら思はれる二三事があるのですが、餘りに分量が多くなると、編輯上ご迷惑と御察しするから、一先づ本稿は完了として、次に又適當な形式の下に補ひたいと思ひます。

た。

とにかく消費組合のやうな仕事は、主婦の心からの共鳴と協力がなくては成立たぬ。いやゆく／＼かういふ仕事はわが日本に於ても、すでに、諸先進國がさうなつてゐるやうに主婦の意見が主になつて動かしてゆくやうになるにちがいない。我々としても、ぜひさういふ日を一日も早く持ち來すために、もつと／＼組合を中心にして家庭婦人を動員する必要があるのだと思ふ。

高知市外の明治村にも私は行つた。村の宮地長老その他が、「もつと婦人たちに組合の仕事の性質を知つて貰ひたい」といふ希望から、村ぢうの主婦、未婚の女を特に私のために集めて下さつた。產兒制節問題についても村の主婦が、眞劍な態度でいろ／＼に質問を出して下さつたのが、私にたまらなく有難かつた。知識階級婦人の概念的な議論や運動を私は大きらいだが、その心が、あゝしてどんな問題についても處女のやうに眞劍な氣持で出て來られる素材としての一般の家庭婦人の前に、私は私自身も微力ながら協力して消費組合を以て全世界を包むまでに努めなくてはならぬのだと心の中でさう誓つた。

殊に明治村及びその近村七ケ村の消費組合は、誰に敎へられるともなく、村民がその生活の苦しいことゝ、町で買ふ物價が非常に高いことから、共同仕入れの必要を痛感して消費組合を拵へた、といふ事で、全ての農村の人たちに聞かせたいやうに思つた。

全く今日の農村は、作つたもの（農作物）は小作料としてとられる外はぐつと安い捨値で買はれてゐる（私達が毎日市場で買つてゐる値段と、農村で賣つてゐる實際の値段とのヒラキの大きを見よ）而も、買はねばならぬ日用品諸雜貨（着物、下駄、學用品、醬油、酒、白粉等々）はへんぴな土地ほどます／＼高くて品が惡い。

たゞ、消費組合に協力してゐる人々に對して我々が買ふものはなぜかうも高いかについて、今の商業の裏面をみんなに考へさせなくてはいけない。そこまで消費組合が敎へてゆくのでなくてはいけなと、思つたことである。

お花見の記

珍らしや、貧乏ひまなしの職業婦人社が花見をするんだとよ。

口さがない江戸雀は、その頃から云つて囃つてゐたとかゐなかつたとか、四月十五日、案內に依つて新宿驛の待合室に集合して、午前十時に稻田登戸に向けて出發した。

稻田登戸には天狗茶屋を開いてゐられる贊助員の前田つぎさん夫妻が一行を待ち設けてゐて下さるのだ。待つ人ありて、出かけてゆくちう事は何てう愉快な事だ。若い青葉がくれに一行の中の大半は子供づれでエンヤラサ、エンヤラサと登つてゆく。

いはゆる花見氣分が少ない丈けに、ほとりも少なく悠々自適、ねそべり乍ら一日の快をむさぼりつくした。

歸りに、途中下車して、平塚らいてう氏宅へ、大擧して、猛襲、頭が痛いといつて臥床中だつたらいてう氏を起してしまつたばかりか、一緒にあそこいら邊の散歩までして、職業婦人社の近況や、今度計畫中である婦人消費組合協會の仕事などについていろ／＼話し合つた。

その又歸りが脫線して、奥社長邸を包擊、こゝで、スキ腹に飯にありついて一同やれやれ。うれしい事に、社長邸は近頃温泉を開業してゐる。內湯でない、一回五錢をフンパツすると一足でゆかれる共同浴場だ。みんなでドンブリ汗を流して歸つて行つた。（十五日夜記）

何のための社會事業

――不開の託兒所

村山文子

東京市社會局が小石川區大塚辻町の養育院跡の敷地に、立派な託兒所を設けて、工事萬端はすでに、出來上て居るのに未だ開所の運びに至らないことについて各方面から抗議が出てゐる。新聞紙上に報道されたところを見るとこの新設の託兒所の附近（府下巣鴨宮下）には櫻楓會（日本女子大學）經營の舊い託兒所があるので、市設の託兒所を設けられては櫻楓會側の事業經營の上に支障を來すと云ふので、非上秀子氏等から猛烈な抗議を受けて市の方が行きなやみとなつて居るといふのである。

私共は、櫻楓會側の抗議は、はたして、當を得たものであらうか？　又事實、同所には、只一つの託兒所しか要らないのか？　といふ事に就いて考へて見る必要があると思ふ。まづ地理上から見て、大塚辻町の新設託兒所と櫻楓會のとは直徑にして約一丁餘しか隔つて居ないのであるが、櫻楓會側が、氷川下町から、あの邊一帶の低地に住む人達を目的として居たのに對して、社會局のは大塚高臺、即ち、辻町から、仲町、窪町、更に、氷川の谷と反對の、大塚坂下町方面を目的とした事は、明かである。しかも社會局としては、好んで此近接地を選んだのではなく、丁度東京市の養育院が府下　下板橋に移轉した跡を利用して、職業紹介所、授産場、隣保館、市設質屋、兒童相談所等を、設ける事になつたのであつた。殊に同所は、地の利はよし、附近に兵器廠等もあり、殊に震災後異常の發展を遂げた地でもあるので、託兒所をも附設する事となつたのであるらしい。これで、抗議の一つの理由は成立しないわけである。

更にも一つ、考へなくてはならぬことは、櫻楓會の託兒所は、設立が古いだけに――而して財政的にも非常に貧しい――設備が不完全である。萬全を期して計畫された社會局のものにこれを讓つて、事業方面を變更することも不可能ではなかつたであらう。

勿論、託兒所の事業が、今日の樣な發達を遂げるに至るまでの櫻楓會の努力と熱心は充分に認めもし、又感謝もしなければならないのであるが、それとこれとは別問題でなければならぬ。

元來、社會施設は、いくらあつても、多すぎるといふ事はない。又甲より乙の方が、設備が行きとゞいて居れば、當然乙は甲に代るべきであろう、それでこそ、眞に無産者の福祉はもたらされるのである。社會事業は自己滿足ではいけない。利己心を以て、或は名譽のため或は何かの利益のために社會事業をする事は斷然おことはりである。

この場合に於ても市社會局の施設が櫻楓會のものよりもまさつて居るならば、なほさ

らのこと一日も早く開いて、近隣の無產者のために役立てゝ欲しいと願ふのが人情である。所を近くして幾つかの同じやうな施設があらうと(勿論、あり過ぎる分は、不足してゐる地方へ均分されたいのはあたり前だが)良否の撰擇權は一つにその施設を利用せんとする者に任せていゝ。あまりに營業者流であることは苦々しい限りだ。如何に設備は申分なくとも、かうした事業で最も大切なのは、當事者の心がけである。子供こそ、この二つの託兒所に對して、最も公平な裁きを與へるだらう、

私は、もつと／＼託兒所の數が多くなれば更によいとさへ思つて居る。櫻楓會にしても、社會局には社會局でやらしてみたらいゝではないか。設備の及ばない點は、愛を以つて補ふだけの決心はないのか。その上で立ち行かないものならば、いさぎよく、ゆづつたらいゝであらうに、何も名目だけの事業のために無理な事業を續けてゆく必要は少しもないのだ。

有閑階級のおもちやのやうな、いはゆる天降り式の慈善的な社會事業は、もはや跡を絕つべきときが、來たのである。

斷片

(福井) 小津古千代

三月二十日、社會民衆黨の總選擧批判演說と題した中に安部磯雄氏田中女史の御名前がみえた。當福井市では始めてゞあるので非是出かけたく思つて、學校の方の送別園遊會も母の病氣も、子供が風を引いて三十八度五分の熱があるのも犧牲にして、朝から湯茶ものまぬ樣にしてパンとみかんをもつて、晝食をとらずに出かけた。

いよ／＼加賀屋座についてみると、入口に『二十錢お願ひします』と書かれてあつた。やつぱり無產黨だからと思つた。入口には七八名の警官、入場してみると案外まだ人は尠い演題を見ると田中女史の名前が見えぬのに一寸がつかりした。警官の數ばかり馬鹿に目立つ。出かけるとき無產黨の講演なんかにいつて巡査にでもとがめられたら馬鹿らしい云々と云はれたのもはねつけて、何自分は食べずぎらひは大きらひ、殊に敎育者なんかと云ふものは各方面の實際を知つてをく必要がある、と云ひすてゝ出かけて來た事なども思ひ出された。以前の永井柳太郎氏などの應援演說のときとはすつかり場內の空氣がちがつて、一種の不安のともなつた淋しさを感じた。それでも定刻には一ぱいになつて開會。數人の演說のあとに、待たれる安部磯雄氏が立たれた。以前の政友會や民政黨の應援演說の時とはすつかり違つて、落付いてしんみりとした氣もちできかれた。以前の花火線香的お祭りさわぎ的とはちがつた心からのさけびは熱にみたされて居つた。社會主義赤化思想無政府主義共產黨、さう云つたものと無產黨を凡て一つの危險思想と云ふグループにまとめて考へて居る當地の人達には大分納得がいつたらしい。尙ほ無產

黨の各派についても極くわかり易い例をひいて説明されたので各派の立場もよくわかつたそれにしても婦人聽講者の尠なかつたのは惜しいことであつた。婦人に自由をあたへよ云々の聲は高いが、まだこうした方面の聽講者の尠ないのは？ 食べずぎらひの爲めかしら、それとも自分だけの安全をはかつた方が悧巧な人と云ふ世評の爲め？ それともこうした方面に趣味をもてないのか？ それとも女としての自分らの不[illegible]の位置に無關心で居れる程に痲痺症にかゝつて居るのかしら。それとも、そんな處に出かける樣になつては女らしさを失ふとでも考へてゐるためかしら。

女らしさの内容を吟味して考へてみる必要がある、としみぐくさう考へられた。

無産婦人同盟の再組織提唱

池田むめ

本紙二月號山川菊枝氏の論文『無産婦人運動に就いて立場を明らかにする』に就いて農村の無學な、そして極めて、若いいはゆる農村婦人である私が再讀の後特に感じた點を書きかけて置いたのを、留守中に行はれた家宅搜索の結果、彼等の想像したであらう問題とは何等關聯を持たぬのに他の一切の物と同時にッヅサラッチ行かれてしまつた。忙しい中に今一寸した自分の時間を持つことが出來たので、まとまりのつかないトンチンカンの點は御許しを乞ふことにして、今後本紙執筆者諸兄姉の嚴正なる御指導をも願ひたく婦人運動に對する一農村婦人の愚見を書いて見ることにします。

× ×

(本紙三月號)堺眞柄氏の『合同は婦人から』中にも極めて、興味ある筆勢で書かれて有つた如く、私達農村婦人も常に痛感する、當然打つて一丸とならねばならぬ婦人同盟が、極めてサ、イの點から、馬鹿さ加減にも程が有りそうなことに、三ッに分派されて居る。

不注意なる指導者に依つて作られた同盟の此れ等の缺陥を根柢から引きぬいて、眞に力强い、威力有るヅッシリと固く重い同盟、組合の結成の出現を私は常に衷心から欲して止まぬ。あらゆる新聞は書くではないか、關東婦人同盟に對して日勞黨指導の婦人同盟が出來た、と。なんとあの記事のひやかし的な、同盟の尊嚴を傷け、運動の障碍をなし、輕薄的な、讀む者に取つて吐氣をもようさせることよ。

何故これ等の事に三ッの婦人同盟指導者達は氣着くことが出來ぬのであらう。否氣着いて居りながらも愛想のつきる程魂惡で日和見的に固められた彼等は、敢へて、立上らうとは仕ないのであろう。

本紙先月號山川菊枝氏の論文にも書かれて有つた樣であつたが、特に婦人のみの所謂婦人同盟なるものを結成するからには、何等かの、たとへば婦選獲得運動と云つた風な特殊な目に置いてのみ闘争すべき種類の物で、あつて婦選が獲得された場合に置いては、何等特殊的に、婦人のみの同盟の存立は認められぬと思ふ。なに故なれば無産婦人運動は全

無産階級解放運動の解決に依つてのみ、解決なされる物であるからだ。特に婦人を、婦人のみの同盟に、切りはなす事は、無産階級解放運動より婦人其の物を去遠し、無産階級運動と、無産婦人運動とは常に一致せざる別物なるが如き大なる誤謬を、大衆をして正しき物と信じせしめてしまふからだ。三ッの婦人同盟が提携して婦選獲得 綱目を陣頭にギリ〳〵と力强く闘爭し、獲得後たゞちに解體して黨に加入すべきだ。そしていつ如 何なる場合に置いても、特殊的な、婦人同盟を必要となす事件の起つたときに於てのみ、全婦人大衆が一勢に何者かの名に置いて、結合なし得る樣、組織し、指導し、決定せねばならぬ。婦人運動者の役も恐れねばならぬ事は、無産階級運動(勿論無産運動より婦人運動をのぞいた運動は、完全な無産運動ではないが、又有てはならぬのであるが、云ひ現はす都合上かりに無産階級運動と書く)より特殊的に、婦人のみが、婦人運動が、やゝともすれば切りはなれ樣、切りはなされ樣とすることにあらねばならぬ。

無産階級運動に取つて、無産階級運動と婦人運　とが、水平進行せずして、何の無産階級運動ぞや！である。現在の農民、日労、社民、いづれも、政黨婦人部より强制的に婦人を追放し、根本より誤れる、彼等指導作成になる、婦人同盟に參加なさしめた事は全無産階級解放運動の一大失策事であらねばならぬ。先づ現在の婦人大衆の取らねばならぬ當面の問題は、三ッに分派なされた同盟の合同より初むべきだ。しかる後に、無産階級運動と結びつき。全無産階級解放運動の爲め、力强く、地底から、ギリ〳〵と立ち上り、而して眞劍に、勇敢に實際的に闘爭せねばならぬ。

全無産婦人大衆の諸氏！

眞の解放運動の第一歩は、赤誠有る合同より！！ 現三婦人同盟の諸姉妹よ！ の婦人解放運動は他の勞働者農民の無産 階級運動と水平の並行に依る婦人同盟の即 時組織轉換より初めよ！

農村にゐて

杉本あい子

貴誌『婦人運動』毎月讀ませていたゞきますので、眞にこの頃は生甲斐ある日常生活をつゞける事が出來ます。

私等草深い田舍の女子は、時の推移も知らない如く只生きんが爲に其 の日〳〵を行かんが爲に、朝早くから夜おそく迄無理な勞働をしひられてゐるのです。

然し時代はゆきます。私たち若い女子は自覺なければならない時が、參りました。けれど一寸でも耳にさわる樣な事を若い私たちが口にすればすぐ『女のくせに』とか『注意人物』だとか云つて端的批判を下します。未だ〳〵私たち農村民は習慣とか因 襲とかに非常にわざわいされて居るのです。誠に私たち農村民の心理狀態は 病氣してゐるのです。

その病氣してゐる事を知り乍ら癒そうとする術を知らないのです。いゝえその機會を捉へる事が出來ないのです。

烙印されたる苦艱（四）

（婦人革命家の一生）

ヴェラ・フィグネル手記
大竹せい抄譯

—人　民　派—

一八七六年の末頃にはロシヤの革命運動は宣傳派（プロパガンヂスト）と一揆派（ブンタリ）といふ二つの枝にわかれた。前者は北露に、後者は——南露に勢力をもつてゐた。當時、ある者は雜誌「フペリョード」またある者はバクーニンに何等かの形で連絡をもち、そしていづれも人民の中での活動の必要を認めてゐたが、その活動にたいする解釋は異つてゐた。宣傳派は人民を白紙と見て、そこに革命を描き出すために、大衆を道徳的にも、智的にも自分達の水準まで引き揚げねばならぬと思つてゐた。そしてそのために準備するといふのが、彼等の信條であつた。一揆派はそれと反對に、人民の大衆に學ばねばならない、人民——はその境遇によつて充分に社會革命に向つて準備された社會主義者であつて、現存する制度にたいし、ある時は消極的に、ある時は積極的に、絶えずこれにたいして反抗するものだと信じてゐた。かうした個々の反抗心と些細な憤激とをひとつに結合する——それがインテリゲンツイアの任務だと思つてゐた。つまり燃燒すべき材料は農民の間にある。小さな火花も焔と化す、が、たゞ農民の間には火花が足りない。その火花こそインテリゲンツイアだ、と思つてゐた。

だから彼等は、活動のために特別の組織や原理はたいした重大なものではない、至るところ人民は革命に準備されてゐるのだから、どこでもいゝ、最初の火花さへ起ればいづれの道焔（みち）は隨所にあがるものだと思つてゐた。

この南路の空氣と對立して、北露では組織といふ問題が何よりも重大視せられてゐた。從つて洗練されたタイプの組織は北露において作りあげられたいろ〳〵な經驗から蓄積された。事實南露派は何の傳統をも地方に殘すことなしに、ばら〳〵に運動してゐた。つまりカラコーゾフ派、ネチヤエフ派ドルグシン派らの如く、個人を中心としていくつもの團體にわかれてゐた。が、北露ではそれと反對に大きな團體が組織された。個人の名を冠してゐたチヤイコフ派を最後として、一八七六年に『土地と自由(ゼムリャ・イ・ヴォーリャ)』派が組織され、それは遂に一八七六年になつて『人民の意志(ナロードナヤ・ヴォーリャ)』黨を結成するに至つた。

一八七六年秋の『土地と自由』團の組織に際しては、流刑地から歸つて來た有名な活動家で、もとチヤイコフ派のマルク・アンドレーウイチ・ナタンソンが非常に働いた。最初この團に參加した主な人々は彼のほかに彼の妻オリガ、ナボレシエフ、アドリアン・ミハイロフ、アレクサンドル・ミハイロフ、ボゴリユボフ、トロシチヤンスキー、プレハノフ、バランニコフその他であつた。その後別のグループから、ユリー・ニコライウイチ・バグダノウイチ、ピサリヨフ、エンクワートフ、マリア・レシエルン女史、ワイマール、グリゴエドフ、スボーチナ女史、コルニロワ女史、それから私等が參加した。新しい綱領によつて大衆の中へ進出する計畫が立てられた。その最初の試みとして、この年十二月六日カザンスキー寺院前廣場のデモンストレーションが失敗に終つてから間もなく、未決監で獄死したチエルヌイシエフの葬式を名として、勞働者を罷業せしめ、大學生を召集し、憲法獲得の目的で請願運動の示威行列が行はれた。これらはいづれも社會の輿論と同情とを呼び起す大衆運動の目的を持つた、ロシアにおける最初の試みであつた。

このカザンスキー寺院の示威運動の時は、恰度プレハノフの演說が終るや、若い勞働者ヤコフ・ポタポフが『土地と自由』團の名を書いた赤旗をくり擴げるや、巡査はすぐさま呼びこを鳴らしたので群集はすぐに解散した。

私は、妹のエフゲニヤとポタポフと三人でネブスキー通りを歩いて晝食に出かけた、すると、二人のスパイはある道かどに來たとき、いきなりポタポフの手を捕へ引立てた、が、彼等はポタポフ一人に氣をとられて私達二人には何の注意も拂はずに彼のみを引立てゝ行つた。この運動で三十五人の犧牲者を出したが、ともかくもこれによつて新しい團體の行動

は公衆の前に展開されたのだつた。

カザンスキー寺院の示威運動の後『土地と自由』の團員の一部はペテルブルグに殘り、あるものはサラトフとアストラハンへ出かけた。我々のサークルの數人はサマラへ移つた。が、私は一八七七年の八月までペテルブルグに殘つてゐた、といふのは、サマラには何の知り合ひも持たなかつたから。

——第 一 歩——

一八七七年の春にペテルブルグで裏切り勞働者フイノゲノフは『土地と自由』團員の手で暗殺され、それから團體の主腦者ナタンソンは捕縛された。そして、その夏未決監で恐しい事件が起つた。警視總監トレポフはカザンスキー寺院の示威運動に參加した廉で捕縛され未決監にゐたボゴリユボフの名で有名なエメリアノフにたいして拷問を命じた。この事件は、同志の間に非常な憤慨をかつて、すべての者が復讐の計畫を始めた。南露からトウレボフに對する暗殺の目的で、多くの人々がペテルブルグへやつて來たが、何の結果も得られなかつた。ところが、この復讐は、ヴェーラ・ザスリツチ女史によつて遂行された。

ヴェーラ・ザスリツチ女史の射撃事件が起つた時には、私は既にヴォルガ河沿岸のサマラに居て、彼女の英雄的行動に心から熱情をよせた。そして私がペテルブルグを出發する少し前に、マリノフスカヤ女史のもとで彼女と逢つた時、ほんの通り一遍の印象を受け合つただけであつたのが惜しまれた。

その後暫らく私は田舍の縣立病院の醫師補として、農民の間に日を送り、しみ〲とロシアの貧農と地主との闘爭のすがたを見せつけられた。(つゞく)

地獄

（三部曲の內）

原作　ゲオルグ・カイゼル

邦譯　新居格

人物

シュパッイーレル（散歩者の霊）
リリー
エーチット
寶石商
辯護士
獄吏
刑務所長
ホテルの主人
シルクハットを冠つた紳士
赤革の手袋をした紳士
若い紳士
小犬をつれた貴婦人
絹布を纏つた貴婦人
會計掛

小僧
女店員
ボーイ
脱獄者
賣笑婦
獄卒、看守、拘留された者、四人、等

グランドホテル。金紅色の客間。電話が鳴る。

エーヂット（右手から急いで出て來る。帽子を冠つた儘、電話を聞いてゐる）リリーさん？（言葉を進めて）來て使は來なくつてもよかつたの。（聴き直して）來てもいゝわ。（右手へ退入る。帽子をぬいで出て來る。――革の手提より金を探がし出す。左手でノックする）

エーヂット　はい。（シユパツイーレルが入つて來る。襞だらけの襟付外套を醜く着てゐる。無恰好に繩で括つたボール箱の包を腕に抱えてゐる）

エーヂット（金をシユパツイーレルに渡そうとして）それを椅子の上にお置きなさいましな。

シユパツイーレル（ニヤツとして）私は美術家ですが。

エーヂット（凝乎と見る）

シユパツイーレル（極り惡るそうに）實はお買ひになつた方に興味を持つたものですから。

エーヂット（大きく笑つて）御免なさいましね。――笑ひまして――でもお使賃を差上げるのが何で可笑しいんでせうねえ――あなたは美術家で被居るのね。

シユパツイーレル（氣取つてお辭儀をする）私はシユパツイーレルです。

エーヂット（餘所々々しくして）その繪はトランクに入れときませう。その蔽ひのない方です。

シユパツイーレル、（机に凭りかゝつて――繩を無器用に解

こうとて——のしかゝろ)

エーヂット　(注意して)　もう美術協會でお拂ひして受取證を貰ひましたのよ。

シユパッイーレル　(上氣して不安さうに)　私の陳列して置いた作品の中で——「蘭」をおとりになつたのですね。——(繪を取出す)——この作品は手離したくはないと思つたのですが——そしてこの一枚だけが賣れたのでした。(立ち上り——エーヂットに向ひ)　私の繪をみんな持つて參りました。あなたが「蘭」をおとりになりましたからね。

エーヂット　わたしの買ひましたのは「蘭」でしたか知ら。

シユパッイーレル　(氣を採んで——短かく)　繪を全部買つて頂きたいのです。

エーヂット　わたくしに。

シユパッイーレル　千マルクでね。

エーヂット　何かお思違ひをなすつたんぢやありませんか。——わたしはお供かお連として旅をして居る者ですわ。

シユパッイーレル　でもこの繪を買つてお拂ひなさいましたね。

エーヂット　それは私が拂ひしましたわ。

シユパッイーレル　(凝乎と前を見て——)　どうか私の作品を奥様にお侑めして下さいませんか。

エーヂット　(面白がつて)　そりあさうしてもよござんすわ。

シユパッイーレル　(元氣付いて)　繪をこゝに置いときませうか。

エーヂット　えゝ、どうぞ。

シユパッイーレル　奥樣にお解りになるやうに話して下さい。どうしても買つて頂きたいんですから。

エーヂット　それで掛値なしのお値段は、

シユパッイーレル　千マルクです

エーヂット　覺え易いカッキリのお値段ですのね。

シユパッイーレル　(まだ立つて居て——胸のポケットを搜

しながら急いで）　そうです、千マルクなんです。（去
る）

（エーヂット窓を開らき——戸外を覗いて、ひどく
いら／＼した容子をする。窓に腰を掛け——ドアの
方を見る　リリーが入つて來る——戸口に立つてゐ
る）

リリー　（情なさそうに）　絶交にならないこと。

エーヂット　さう。いゝわ、人を旅に誘つておいて
その費用を持たせるなんて、よくまあそんなこと
が出來たものね。

リリー　だつてわたし、几帳面にしときたいのよ。

エーヂット　そりやしやうと思へばね。

リリー　（自烈太そうに頭を振つて）　けど出來ないこと
もあるわ、乾度あつてよ。

エーヂット　出來ますとも——

リリー　素敵な眞珠を買ひたくたつて買へるとはき
まらないわ。（リリー、エーヂットのところへ走つて
行き、——抱き付いて接吻する）

エーヂット　あなたのボブさんに、買つてあげたい
の。

リリー　（首を振つて——耳朶をつまみ）　このお粗末な
双方の耳朶のためにね。

エーヂット　耳飾なのねえ。

リリー　灰色の白い點々のある耳飾なのよ、色澤は
まるでないんだけれど——所々鮑貝いろの暈が懸
つてゐるわ。

エーヂット　見せて下さらない。

リリー　まだ寶石屋に置いてあるの。今に屆けて來
るわよ。でも、わたし少し計り模様變をしやうか
と思ふの。

エーヂット　良い思付が何かあつて。

リリー　えゝあつてよ、その耳飾をつけてゐたら、
うちのボブ何と云ふか知らと思ふの。

エーヂット　何とも云はないでせう。

リリー　ボブをそんなに見惚るものぢやなくつて
よ。

エーヂット　精々勘定書を見てからならね。

リリー　そんなことはないわ。エーヂットそれ位のお金ならわたしのポケットにだつてあつてよ、旅をするなら、世界を買切りにする位でなくちやねえでなきあ、何が面白くつて。

エーヂット　私も一寸買物をしてよ――勘定はあなた持で。

リリー　そりや罰金として出しますわ。隨分あなたを待たせたんだもの、大變な金高なの。

エーヂット　繪なのよ。

リリー　美術協會にはどんなものが陳列してあつて

（繪を取り上げる）

エーヂット　寸法が丁度よかない。

リリー　この繪は氣紛れな制作ねえ、ビアーズレー張だわ。

エーヂット　揚句の果にそれを買つたの。協會の支配人がそりや骨を折るんだもの。わたしが會場から出ないのでひどく思召があるとでも思つたらしいの。

リリー　値段は。

エーヂット　敲ひ付で、千三十マルクよ。

リリー　まあ　エーヂット

エーヂット　私　三十マルク拂つたの、殘金は（エーヂットほゝ笑みながらリリーを抱き）誤魔化すのよあなたは眞珠をお買ひにならなきあ、いけないわ、可愛いゝリリーちやん。

電話が鳴る。

リリー　（聞く）　誰方――えゝ　わたし二階に居りますわ。（エーヂットに向ひ）　寶石屋さんが來るの。（鏡の前に立ち――髪を直しながら）　眞珠は夜の方がむろん引き立つわねえ。

エーヂット　（重々しい窓掛を閉めながら燈火(あかり)を全部つけ）採光試驗よ。

リリー　どうしてその畫帳が、あなたの手許にあるの。

エーヂット　あの人、素敵だつたわ。好きになれる

素直よ、でわたし一枚買つたの、——すると、そのことを美術協會からすぐに聞いて來たらしいの——賣渡しのことを——五分と經たないうちにホテルに制作を持つて來て、どうか買つて下さいつて云ふのよ。

リリー　この後始末は誰がするの。晝過ぎには出發んぢやありませんか。

エーヂット　あの人、玄關番からでも受取ればいゝわ。

（ドアを叩く、）

リリー　お這入んなさい。

（寶石商人——大きな圖體——入つて來る。）

寶石商人　お邪魔ぢやございませんか、

リリー　どうぞ　あなたはあれを——

寶石商人　（小函を取出し）　何の雜作もございませんですよ。手前自身で——實はよろしければ——もつと長いツメにきめて置きたかつたのでございますが、取分け奥様の様な卵形のお顔立には——ほんとうにクツキリと卵形でいらつしやいます。でもお好みがございましてね、お好みと云ふものはどうも致方のないもので御座いますよ。——それにお好みを他へ持つて參る譯にも行きませんしねえ。

リリー　（じつと見て）　いゝえ——駄目だわ、それは間違つてゐますわ。どうしたんですのよ一體。

寶石商人　でもこれがお氣に召したと仰言つたのですが。

リリー　エーヂット　御覽、何んて不細工な——詰らないの、わたしの顏が死んだやうになるぢやないの、スフインクスのやうに。困るわねえ。

エーヂット　眞珠つて動かなきあ駄目なものよ。

リリー　のべつに動かしていりやいゝの。（寶石商に向つて）　これぢや使ひみちに困まちもうわ。どこから來いと云はれたつてこれでは出て歩けないぢやないの。まるで日曜日の女中みたいだわねえ、寶石屋さん、もう一度持つて歸らなきあならないわ。

寶石商人　あの時手前が申上げましたことを奥様はお思ひ出しになるでございませう。

リリー　ちやんと寸法を決めませうね。

寶石商人　（机の傍に寄つて）　それが何よりよろしうございます。

戸を叩く。エーヂット開ける。――シユパツイーレルが入つて來る。

リリー　（机に凭れて）　鉛筆は。

寶石商人　（ポケットを捜ぐる）

リリー　エーヂット　あなた鉛筆を持つてゐないこと。

エーヂット　手提の中にあるわ。

リリー　では持つて來て。

エーヂット　えゝ――手提は何處に置いたかしら。

リリー　（立ち上り）　誰方です。

エーヂット　さつき話した畫家きさんよ。

シユパッイーレル　シユパッ　イーレルです。

リリー　有難う　（圖を引きながら）大きく描きますわよ。

エーヂット　リリー　あなたは繪の表紙に描いてるぢやありませんか。

リリー　おや〳〵

寶石商人　奥さん、私の手帳をお使ひ下さいまし。

エーヂット　（畫帖をシユパッイーレルに渡し）　わたしのお友達はあなたの繪を喜んで拜見しましたわ。中に一つ二つ何とも云へない立派なのがありますつて。私達にそれがとても氣に入つたのでご座いますの。その一つが手に入つたので喜んで居るのでご座いますわ。

シユパッイーレル　どうも有難う。

リリー　眞珠と耳との間はね。――

寶石商人　眞珠の割合はプラチナのツヽメで加減をいたしませう。

シユパッイーレル　奥さんのお好みだそうですが――お買ひ上げについては――どんなものでせう。

エーヂット　お氣の毒ね。

リリー　（立ち上り）　わたし後程驛に行く途中お寄りして頂くわ。
寶石商人　奥さんほんの半時間ばかりの仕事でございます。
シユパッイーレル　千マルクと云ふ値段をあなたは仰言つて下すつたのですか。
エーヂット　お金のことは全く問題外ですわ。
リリー　（手提をもつて）　いくらでしたつけねえ。
寶石商人　二千四百マルクでご座います。お後でも宜しうございます。充分お氣に召すまでは、頂きませんでも。
リリー　では　お好きなやうに。
寶石商人　奥さん　そりや一點の非の打ちどころもないのでご座いますよ。（去る）
エーヂット　リリー　この方があなたに鉛筆を貸して下すつたのぢやないの。
リリー　さう〳〵　寶石屋さんが仕舞込んで行つちやつたのね。
エーヂット　あなた、まア追付けるかも知れないわ。
シユパッイーレル　（ムッとして）　僕は――何も儲けやうと思つて賣るんぢやないんです。――千マルクが何とか物になると思つたからなんです。

リリーとエーヂット、眼を見交す。

シユパッイーレル　僕は友人の電報を持ち歩るいて居るのです。――その男は千マルクが入用なんです。――千マルクで命が助かるんです――でないと今夜死んぢまふのです。――どうしてあの男が僕の所へ云つて寄越したかは分からない――僕はその男と特別に親交がある譯ではないのです――永く會つても居ないのです――何だつて　僕に呼びかけたんだらう――けれど頼まれたんだ――さうして人が一人助かるんだ。

リリーとエーヂット、互に目で知らせる。

シユパッイーレル　今朝から町中を歩き廻つて――どうかして助けなきあならない――美術協會へ走つて行つたり――陳列をしたり――どれか賣れてや

しないかと――そうしたらそこで一枚賣れてゐる――僕のを誰が買つたかそれを聞き出して――他(ほか)に持つてゐるのをその人に見せたなら――もつと買つて與れやしないかと思つて――僕は千マルクが是非とも入るんだ。

リリー　そりやどうもお氣の毒ね――けれどわたしあなたのお友達をまるで知りやしないんぢあないの。

シユパッイーレル　僕も全く親しくはないのです。

リリー　なら何も他人(ひと)の不幸(こと)をそんなに心配することはありませんわ。

シユパッイーレル　電報は――いろんにこんがらがせて――一人の人間の運命が僕の双肩に背負されてゐるのです――それをどうしても振落すことは出來ないんです。――（リリーに向つて）――あなたもこの話をお聞きになつたんですから、あなたにも責任がありますよ。

リリー　そりや可笑しいわ。

シユパッイーレル　責任を回避したら大變ですよ。

リリー　（短かく）あなたの輪を、買切つちまふわ。

シユパッイーレル　お買ひにはならないのですか――眞珠は。

リリー　（遮つて）それは大きにお世話だわ。

シユパッイーレル　眞珠のために二千四百マルク、耳たぼにつける戯れの眞珠のために――そうして一人の命を助けるのに　千マルク。

リリー　それは何もわたしにかゝわりはありませんわ。

シユパッイーレル　一人の人間が今　死ぬか生きるかの境目で苦んでゐるのに――

リリー　わたしはその人を知らないんぢやないの。

エーヂット　どうしてそんなに澤山のお金が急に要るの。

シユパッイーレル　生きて行くにはね――あなた方のやうに――僕のやうに――また他(ほか)の人のやうに。

リリー　わたしは嫌だ、まるつきり知りもしない人

に千マルクも出すなんて。

シユパッイーレル　眞珠は一つになさい――その一つは人の命のために――。

リリー　でもわたしの耳は二つあつてよ。

シユパッイーレル　あなたは僕の話を聞いて――知つてくれたんです。

リリー　――でも眞珠下げは二つ入用ですわ。エーチット窓を開けて。

エーチット　（窓掛を引く）

シユパッイーレル　（頭を抱えて――リリーを睨めつけ――うんと立ち上り――急いで去る）

エーチット　（鏡を拭つて）　贓物から離れたやうだわねえ。

リリー　一緒に來て頂戴、――耳たぼへ小さな孔を開けて貰はなきあならないんだから。

拘留所。白壁の四角な部室。灰いろの石床。二つの四角な鋼鐵の引戸が後にあつて、階段がそれに沿ふてゐる。中央に鐵の荒造りの椅子。羽目板の蓋に赤の信號燈。右と左に狭い鋼鐵の扉。鋼鐵の腰掛。そこに坐つて――綠色の、鯱張つた――獄卒三人。丸太机の後に――凝乎と見詰めて職務に服して拘留所の獄吏が坐つてゐる。靜寂。赤の信號燈がパツとかゞやく。丸太机でガチャンと鳴る音。

獄吏　（扉を開け――羽板から圓い赤札を引出す。それを讀んで）獄卒。

獄卒　（丸太机のところに來る）

獄吏　（獄卒に赤札を渡し）　拘留所へ。

獄卒　（去る）

獄吏　羽板を再び納め――机の扉を閉め――槓杆（ハンドル）を押す。

丸木机の中でしばらくガチャン〱と云ふ音。赤の信號燈が消える。靜寂。右の方から他の獄卒拘留人を伴れて來る。鬚の生えた男――しづかに入つて來る。

獄卒　拘留人です。

獄吏　（拘留人に向つて）　お前は赤札の人間だな。

拘留人　（ぢつと見上げ――あたりを見廻し――部室を見詰め――突慳貪に吐鳴つて）　私は罪なんかありません。

獄吏　訊問はこれつきりだ――お前は赤札の人間かと云ふのだ。

拘留人　私は――あんなことで罪にはなりません。

獄吏　三度も訊ねるのだぞ、お前は赤札の人間かと云ふのだ。

拘留人　（吐鳴つて）　誰にだつて罪なんかあるものかい、――此處へ引張られて來ただけぢやないか。

獄卒　素早く手首を縛る。

獄吏　こいつは拘留ものだ。

獄卒　押え付けた拘留人を扉口から後に引張つて行く。扉をガラツと開ける――その室の前には薄暗い光の中に鋼鐵の格子がある。縛られた拘留人等――男達――格子の方へ寄つて來て――吐鳴る「俺には罪がねえんだ。」――獄卒が格子戸を開いて拘留人を叩込む。格子戸が再び閉ぢられる。獄卒は左手の前に行き――鍵張つて鍵を掛ける。沈默。丸太机の中でまた音が仕出す。赤い信號燈がぱつとちらつく。

獄吏　（扉を開けて、形板を取出し――赤札をめくる）　おい獄卒。

第三卒獄卒　丸太机の傍まで進む。

獄吏　（第三の獄卒に赤札を渡し）　拘留所だ。

獄卒　（左へ去る。）

獄吏　形板を納めて――扉を閉めて――ハンドルを押す。赤い信號燈消える。沈默。第一の獄卒ひとりの拘留人と出て來る。帽子を冠むつた女。

獄卒　拘留人です。

獄吏　（拘留人に向つて）　お前は赤札の人間かね。

拘留人　（壁の方へ眼を向けて、ぶつ〱云ひながら）――

私に罪なんかございません。

獄吏　訊問はこれだけなんだ、お前は赤札の人間かと云ふのだがね。

拘留人　（前よりも鋭く）罪なんかございませんわ。

獄吏　三度目の訊問だが、お前は赤札の人間かと云ふのだよ。

拘留人　（崩折れて――手で丸太机にしがみ付いて）あんなことで罪になんかなるもんですか――こゝへ引張られて來ただけですわ。

獄卒　（繩を掛ける。）

獄吏　拘留だ。

獄卒　後ろ手の、左の扉のところへ拘留したものをつれて行く――ガラ〳〵と開ける。右の部室と同じやうに女の拘留者は同じやうな身振や叫びをして「私に罪がない」と云つてゐる。獄卒は拘留したものを格子戸の中へ叩き込んで――扉しめる――左手の前の方で待つて居る。沈默。シュパッイーレル――畫帖を小脇に抱えて――左手から入つて來る。

シュパッイーレル　（丸太机の眞近にすつと進み寄り）刻も猶豫は出來ません。殺人事件です。

獄吏　告訴するのかね。

シュパッイーレル　そうです、告訴するのです。殺人罪です。

獄吏　誰が殺されたのだね。

シュパッイーレル　一刻も猶豫は出來ないのです。下手人は逃げてしまひます。

獄吏　すると下手人の名は何と云ふのかね。

シュパッイーレル　それは知らないのです。グランドホテルに居ます。金紅色の圓い客間に。一人の貴婦人です、友人をつれた貴婦人です。旅先で――そしてグランドホテルに投宿してゐるのです。それが殺人犯です。

獄吏　告訴の理由は。

シュパッイーレル　謀殺です。故意にやつたものです。友人と共犯です。これが私の方の申出なんです。

獄吏　君はそれが故意であることを知つてゐるのかね。

シユパッイーレル　一刻も猶豫は出來ないのです。その婦人は今晩立ちます。只今から今晩までの間に起きる事件です。

獄吏　何事が起きると云ふのかね。

シユパッイーレル　人殺しがです。

獄吏　既遂ぢやないのだね。

シユパッイーレル　計畫はあります。犯罪行爲は進轉して行くのです。一分毎に殺人に進んで行くにきまつてゐます。

獄吏　危險なのは誰だな。

シユパッイーレル　友人です。知合です。或る人です。何故かと云ふと。

獄吏　ではその人を保護しやう。

シユパッイーレル　その男は、この街には居ないのです。

獄吏　誰が他の街で兇行をするのだね。

シユパッイーレル　その貴婦人がです。

獄吏　その婦人が第三者を教唆するのかね。

シユパッイーレル　こちらでも殺し――向ふでも殺すのです。一刻も猶豫は出來ないのです。

獄吏　手を下しも教唆もしないものなら殺せないぢやないか。

シユパッイーレル　殺すことは出來ないと仰言るのですか。――殺人は出來ないと――屋根を越えて――街を過ぎて――停車場を通過して――この地球を廻つて――殺人は出來ない――世界の隅つこではと。（丸太机の中でガチヤンと云ふ音――二箇の赤い信號燈が輝く）

獄吏　（丸太机を使つて）おい獄卒。――獄卒。

二人の獄卒　（丸太机の傍に近づく）

獄吏　（二人々々に赤札を渡し）拘留所へ――拘留所へ。

二人の獄卒　（左の方へ去る）

シユパッイーレル　（電報を取出し）友人で、知合ひで

ある——或る男が電報を打つて寄越したのです。

お讀み下さい　獄吏さん　讀んで下さい。

獄吏　（讀む）

シユパッイーレル　私は送金が出來ないのです。貧乏ですから。私は貴婦人のお友達と知合ひになりました。——その方を通じてその貴婦人を——私は何にもしてくれなかつたら事件が起ることを知らせました。その婦人は私になくてはならぬ金の倍以上で寶石商から眞珠を買つたのです。——そりや眞珠を買つてもいゝでせう。——是非要ることはしてくれてもいゝ筈です。——だのにそれをしないのです。

獄吏　君はどうして謀殺の嫌疑を推定するのだね。

シユパッイーレル　推定はしません——見聞したのです。耳で聽き——目で見——今から晩までの間に、防げることが防げなくなるのを知つてゐるのです。

獄吏　（電報をシユパッイーレルに返し）　その婦人を拘引することは出來ないね。

シユパッイーレル　既遂でないからですか。

獄吏　故意が存在しないからだ。

右手の方から獄卒拘留人と入つて來る。青年。

獄卒　拘留人です。

獄吏　（拘留人に向ひ）　お前は赤札の人間かね。

拘留人　（あたりを見廻し——啜り泣をしながら）　僕は——罪はないのです。

獄吏　訊問するが、お前は赤札の人間かね。

拘留人　僕にはありません——罪なんて。

獄吏　三度目だぞ、お前は赤札の人間か。

拘留人　（床に坐つて）　誰もそんな罪なぞはありません。無理槍に引張られて來ただけです。——

獄吏　こいつも拘留だ。

獄卒　縛り——右手の後ろの方へ連れて行く。格子戸の中で男達の騷ぎと叫び。——拘留人が入る。獄卒　左手の前の方へ行く。

シユパッイーレル　獄吏さん、役に立つことならやつ

てみて下さい——どんなことになるか。殺人は起つてはゐない。——殺人は故意ではない——なら、寳石商からの買物を出來ないやうにして下さい。思ひ止まる口實をあの婦人に拵えてやつて下さい。あの婦人は旅立ちます。あの婦人はあなたの嫌疑になるのです。あなたが確證を握るやうにして下さい。今晩になつたらすべて間違ひだと云ふことがハッキリしませう。

獄吏 形板を下げて——開き戸を閉める。

シユパッイーレル あの婦人はもう寳石商へは行けなくなりませう。——良心がある人に強く働く——と私はさう思ふ。あの婦人は寳石屋で買つちやならない——自分は或る一人の人の命を救けなければならないとね。その氣持があの婦人の心に驚くほど泌み込んで——理解が灼熱して——無理に押付けないでもあの婦人の手から慈善的の救助が出來るのです——熱心に自から進んで。

獄吏 （沈默）

シユパッイーレル 獄吏さん　あの婦人は事情を知つてゐます。だからもつと強い刺戟を待つて居るのです。あの婦人は或る人に迫まる危難を知つてゐる。で落付いては居ないのです。——何かこう漠然とした責任感に、もつとハッキリした示唆を待つてゐるのです。——何處かに居る或る人間を助けると云ふ喜びを抑壓してゐるんです。

獄吏 （つんとしてゐる）

シユパッイーレル 獄吏さん——どうかあの貴婦人に赤札を。

獄吏 （元の位の姿勢）

シユパッイーレル 獄吏さん　赤札を。

獄吏 （以前の姿勢）

シユパッイーレル 赤札を。

左の方から獄卒二人、二人の拘留人を連れて來る。一人は女でショールをしてゐる。——も一人は男で無帽。

獄吏 （拘留人に向ひ）お前達は赤札かね。

男の拘留人　（両手を女の拘留人の方へ擧げて）　私には——罪なんかありません。

女の拘留人　（両手を男の拘留人の方へ擧げて）　あたしに——罪はありませんわ。

獄吏　訊問するが、お前達は赤札の人間かね。

男の拘留人　（両腕を女の方へ伸ばし）　私は——あんなことで罪にはなりません。

女の拘留人　（両腕を男の拘留人の方へ伸ばし（、）、わたし——あんなことで罪になるとは思ひませんわ。

獄吏　三たび訊問するが。お前達は赤札の人間だな。

男の拘留人　（女の拘留人の方へ行かうとする。獄卒に遮られて縛られる）　私はどうしても罪にはならない。——たゞ引張られて來ただけなんだ。

獄吏　こいつ等は拘留だ。

獄卒等拘留人の二人を別々の扉のところへ連れて行き——扉を開く。

男の拘留人　私はどうしても罪にあならねえ。——

男の拘留人達　（格子の中で）だれも罪人ぢあねえ——

女の拘留人　どうしても罪ではないわ。——

女の拘留人達　（格子の中で）　無理に引張られたんだわ。

獄卒達　拘留人を押込んで扉を閉める。右手の前に歸って來る。

シユパッイーレル　よろけて、左手へ去る。

辯護士の部屋。部屋は三角で、後ろの硝子戸は尖つてゐる。周圍には書類の棚があつて壁の高さまでギッシリつまつてゐる。右手に戸。中央に綠布張の机。硝子戸のうしろには燈いてゐるランプ、その向ふに勘定場それから金庫。辯護士は灰いろの服。逆立つてゐる赤い頭髮。長くピンとはねた赤い髯――綠布張りの机の上の呼鈴の釦を押す。ガラス戸の向ふには、會計係がシルクハットを冠つた紳士と金勘定をしてゐる。右手から赤革の手袋をはめた紳士が入つて來る。

辯護士　事件は何ですか。

紳士アイルト　債務者が逃げたんです。

辯護士　では債務取立ですね。

紳士　差押をして根こそぎ取るまで。釦一つだつて殘さないやうにしたいのです。

辯護士　一件書類は。

紳士　（書類を取出し）一枚〱この通り保存してあります。

辯護士　（書類をひつくり返して）　著手金八百マルクですが。

紳士　（すぐ樣金を手に持つて）　では現金で。

辯護士　承知しました。引受けました。（紙片に何か書いて――紳士に渡し）　硝子戸の内に勘定場があります。

紳士　（後手へ行く――それより前にそこから、シルクハットを冠つた紳士が左手に去る）

辯護士　（呼鈴を押す）

右手から小犬を連れた貴婦人が入つて來る。

辯護士　どう云ふ事件ですか。

貴婦人　わたしは昂奮したくないのでございます。お話しますと興奮します。どうぞこれをお讀み下さいまし。

辯護士　（讀んで）　著手金は三百マルクですが。

貴婦人　えゝ、よござんすとも。

辯護士　ではお引受けいたしました。（紙片に書いて――渡し）　硝子戸のあちらに、勘定場がございます。

貴婦人　（もう金を手にして）　この事件は見込があるのでございますわ。（後手に行く）

赤革の手袋をはめた紳士、そこを通つて左手へ去る。

辯護士　（呼鈴を押す）

シユパッイーレル　右手より入つて來る。

辯護士　事件は、

シユパッイーレル　世界中で、一番分かり易い事件です。人が一人死んで――もう一人の人間には、眞珠の耳飾が耳たぼでブラ〳〵してゐるのです。

辯護士　一件書類は、

シユパッイーレル　（電報をマントから取出して）　死ぬ程苦しいんです。

辯護士　（讀んで）　あなたは電報で云つて寄越した千マルクを貸したので、その返濟の訴を起すのですか。

シユパッイーレル　違ひます。もつと單純なんです。千マルクはまだ支拂つてはゐないのです。

辯護士　送金者はその金額を送る義務があるんですか。

シユパッイーレル　送金者の義務なぞはこゝでは問題ではないのです。

辯護士　送金者が支拂を拒絶してあなたを侮辱したとでも仰言るのですか。

シユパッイーレル　どんな風に問題をお考へにならうとするのですか。――私は至極單純な事件だと申上げたぢやありませんか。人が一人死んで――もう一人の人間には眞珠の耳飾が耳たぼでブラ〳〵してゐるのですと。

辯護士　私は、事實の根底を見遁したくはないのです。

シユパッイーレル　事實は一人の人間が死ぬんです。

――そして他の一人が眞珠を買ふんです。

辯護士　他の一人とは誰のことですか。

シユパッイーレル　一人の貴婦人です。

辯護士　電報を打つて寄越した人とあなたとの御關係は、

シユパッイーレル　その關係に就いては貴婦人に十分說明しました。あなたが眞珠をお買ひになつたら一人の人間が死ぬんですとね。

辯護士　では告訴をなさいますか。

シユパッイーレル　勿論です　殺人罪として。

辯護士　殺人罪とはどう云ふ譯です。

シユパッイーレル　人が一人死ぬからです――貴婦人の耳には眞珠がぶら下つて。

辯護士　御依賴ですか理由が不十分ですから。

シユパッイーレル　この事件に理由が不充分と仰有るのですか。

辯護士　この告訴は不可能です。（呼鈴を鳴らす。右手より若い紳士が入つて來る）

辯護士　事件は。

若い紳士　遺産問題です。

辯護士　一件書類は。

若い紳士　（書類を渡し）

辯護士　（よむ）　これは全く詐欺です。

若い紳士　これまでの辯護士には散々な目に逢されました。共同相續人は狡猾な反對辯護士と五分の一の內約で私をペテンにかけたのです。

辯護士　著手金九百マルクですが。

若い紳士　（現金を手に持つて）　成功の曉にはこの上九百マルク差上げませう。

辯護士　書いて――その紙片を渡す。

若い紳士　今度と云ふ今度はウンと遣付けてやるぞ畜生奴。

辯護士　勘定場は硝子戸のあちらです。

若い紳士　後ろ手に行く。――その前に小犬をつれた貴婦人がそこから右手へ立ち去る。

辯護士　（呼鈴を鳴らさうとする）

シユパッィーレル （その手をしつかり抑へて） 辯護士さん――法律には――あなたのありつたけの法律書には――あなたの法律書庫にはその法律があるべきです。私の云ふ法律が、

辯護士 そんなのはありませんよ

シユパッィーレル あなたの法律書にないとすれば、その法律書は他の書物同樣、完全ではないのです。辯護士さん 肝腎なことを闡明して下さい。卽ちこの缺陷を、破棄さるべき缺陷を。

辯護士 私は現行法を適用する自動機械です。

シユパッィーレル 權利はしかし時々刻々に新しく發見されねばなりません。鐵道だつて、市街電車だつて、汽船だつて、時間表があるのに、人間だけにはないのです。

辯護士 私はそうは思ひませんがね。

シユパッィーレル そりや今日までは、あなた計りぢやありません、誰もがそうでした。しかし今、一人の人間がそれに當面したのです。將來の事件の先例になるのです。原被兩造の新しい對抗關係がつくられたのです。この判決に出逢はないものは誰もこれ以上生きられないのです。どうしても下さなきあならない判決が下されるのです。下手人が下手人たることの宣告。下手人はあらゆる譴責をも――あらゆる賠償でも。罪あるときには百萬の罪人でも出すのです。罪がない譯には往かないのです。――この審理に對しては他のあらゆる審理が破棄されて、無限の廓淸が行はれるのです。すべての人に重荷となつてゐたこの判決の宣告の日が近づいたのです。――辯護士さん 凝滯より流動へ、あなたの法律の適用を待つて來ませんか。

辯護士 引受けませう。

シユパッィーレル 理由はそれからそれと沸いて來ませう。

辯護士 策略が必要ぢやありませんか。

シユパッィーレル どうでもあなたのおよろしいやう

に。

辯護士　その貴婦人はどの程度に承諾をあなたにしたのですか、あなたはそれを覺えてゐますか。

シュパッィーレル　覺えて居ります。私はそう解釋したのです。でなければ私はホテルの部屋から引揚げる筈はありません。

辯護士　そこがこちらの糸口ですね。

シュパッィーレル　この告訴は目的を貫徹しなければなりません——高唱されなければなりません——總べては好奇心が目立つて賛否を燃立たせるのです——で、百雷のやうに轟く宣告の賛成のみが解決を吹き鳴らすのです。何事にも勇壯な喇叭の吹奏——天地に轟く白ろい大きな喇叭で。

辯護士　結果は疑はしいですよ。

シュパッィーレル　最後の結果に、何の疑もありません。

辯護士　裁判手續は長引きますね。

シュパッィーレル　最も新しいその日は急いで近いて來ます。

辯護士　費用の見積は、

シュパッィーレル　人類と人類とを較べてみると、

辯護士　著手金　千マルクをお手渡し下さい。

シュパッィーレル　千マルクの著手金ですつて

辯護士　千マルクの著手金でお引受しませう。

シュパッィーレル　私は金をもつてゐないのです——

辯護士　呼鈴を押す。右手から絹布を纏つた貴婦人來る。

辯護士　事件は何でございますか。

貴婦人　離婚事件ですの。

辯護士　一件書類は、

貴婦人　（書類を渡し）夫の愛の程度が分りました。「後は野となれ山となれ」でございますの、——つまり離婚ですわ。夫もそれを承知な筈ですの。

辯護士　（書類をめくつて見て）　著手金六百マルクでご座いますが。

貴婦人　夫が入費を一切支拂ふ筈ですわ。　お金を手に持つてゐる）

辯護士　お引受いたします。
貴婦人　勿論ですわ。
辯護士　（書いて——紙片を渡す）　その硝子戸の内に勘定場がございます。
シユパッイーレル　（右手の方へよろ〳〵と歩いて——去る）

街の曲り角。寶石店。晝時のギラ〳〵した炎熱。

シユパッイーレル　（陳列窓によりかゝつて）　あすこにある。——陳列してある。縱にも横にも一杯積み重ねてある。——あちらの棚、こちらの棚、線が流れる。——光が噴き出る——人間がとろける——
——この魅力には誰も抵抗は出來ない。通行人は誰も——ふら〳〵と氣が變る。だから事件なんだ。通行人は誰でもが擒になる。この陳列棚には一切のものが備えられてある。人間がとろける——そうして人殺が行はれるのだ。——俺はもうこの確信に滿足して地球に對する戰鬪の云ひがゝりをつけるのを止めにしやう。誰も俺を無理だとは思ふまい。人間はとろける。——そうして人殺しが始まる。俺がこの寶石店を閉鎖して仕舞ふこと

も出來なければ、この現品を買ひ上げることも出來ないのだ。街を綺麗にすることは俺のかゝわつたことぢやない。この寶石店は何時までも店を開いてゐるがいゝ——人間は陳列窓でとろけるのだ——そして人殺しをするのだ。それがこの街の曲り角で起きる毎日の出來事なんだ。俺は曲つてゐる街を眞直に直せない。全く出來ない事ばかりだ。（シユバツイーレル一歩身を引く） 寶石商人にこの店で喋つたとて無駄だらう——あの男では俺の考方が分かりつこはないし、俺の意見の試驗は失敗に歸したのだ。無駄骨を折るのはやめにしやう。——俺はこの街を去らう。——鋪石道の上で踊りながら——一足前に——一足後に——一足前に——一足後ろに——（その通りする——ぐるりと廻る——）後返りだ。（陳列窓に近寄つて——兩手を窓ガラスに擴げ）人が一人死んだのだ——綿が流れる——光が噴き出る。——人間がとろける——そして人殺が始まる——兇行がこゝで醸されるのだ。——この硝子板一枚の向ふには誘惑がうよ／＼してゐる——惡事の企みが思ひ切つて毒氣を吐きかけてゐるのだ。（肩を窓ガラスに押付けてマントの襟を前に擴げ）俺の頭上の太陽の破壞的な打擊——俺の背後に氾濫する灼熱の河——打ち萎れても俺はガラスの壁を永久に取りのけねばならないのだ。（兩腕を垂れて町の方を注意する） 通行人か。こんな時間に、この晝中の炎天に。（方々の家を見上げて）みんな日除を窓に出すんだ。日蔭になつた部屋はうれしいものさ。卓を圍んだ一家の團欒。快活と眼付と眼付。人間には罪はないのだ——通行人は一人もゐない。みんな自分達の日蔭の部屋に引込んでゐるのだな。戸口から戸外へ出ないで——通りへ出ないで——街を通り去ぎないんだ——だから俺はまだみんなを保護するとが出來ないんだ。——もう少しお待ち——お前達はそんなに急ぎやしまい。もう少しお待ち——俺はこれから準備しなきあならない。——その準備はみんなのためな

んだ――でないと人間はとろける――そうして人殺しが始まるのだ。――俺は一度ある貴婦人の罪になるのを見た、なぜつてその人の處が取除かれなかつたからだ。――今こそ俺は訴訟に就いて罪跡を云ひあてるのだ。――今こそ俺は舊い思想から脱したのだ。（寶石店へ入つて行く。店で我鳴りちらす）

シユパツイーレル　（よろ〳〵と通りへよろけて――走り去る）

寶石商人　（店から出て來て――呆然として――ハンカチで首の周りを拭き〳〵）　私は――店を――襲はれました。

編輯の後

五月號から、新しい、燃えるやうな意氣込みで『婦人運動』の大刷新をはからうと、すでに直接の讀者には手紙で御挨拶をしておいた通り、その準備のために四月號を一ヶ月休刊してまでとりかゝつたのでしたが、萬事中々さう思ふやうにはこびかねました。

從つて、出來上つたものはこの通り、私共としてもまことに不滿足な、貧しいものになつてしまいました。然し、一號又一號と號を重ねてゆくごとに本誌獨特な主張と、味とをもたせつゝ、あつさりと手輕い編輯方針で氣持のよい婦人雜誌を拵へ上げて、全國の書店からも、より廣く、一般の人たちに本誌の存在を吹聽し、共鳴者を殖やしたいと思つてゐます。

六月號から、必ず新聞廣告と、書店販賣とを實行するために、月の二十日頃には發行してしまはねばならないので、今(四月二十三日)五月號分と六月號の分と、兩方に忙殺されてゐるわけであります。未だ新しい購讀者紹介の依賴狀に對して御返事を下さらない方が大分ありますが、此の際一人でも二人でも皆さんの力で殖やして下さいませ。

婦人雜誌といふ婦人雜誌が、ます〳〵低級になつて來て、婦人の氣持を墮落させるか、虛榮心をあふりたてるか、下らない告白物に安つぽい涙を流させるか、それ位の役目しか果すことが出來ないやうな惡どいものばかりが、而もなほ現在でも幾十萬と羽がはえて飛ぶやうに賣れてゐるといふのだから、全くかなわない。然し今日あるやうなあゝいふ婦人雜誌を橫行させてゐることについては、女は、充分に反省するところがなければならないと思います。

……新しい昭和の御代の婦人として、私たちの前途に負はされてゐる社會的任務は、非常に大きうございます。今日の時代的な空氣は、何がなしに私たちを促がし〳〵して、舊い殼を破つて新しい汝、ほんとうの汝自身の生活を築き上げよ、と敎へてくれてゐるでありませんか。

女としての私たちは、ほんとうに、餘りに長い間、自分といふ大事な〳〵いのちの存在をおろそかにしつゝ、ロクでもない四圍の事情や、人の思わくや、因襲やに自分で自分を縛りつけて本意ない暮しをつゞけて來てしまいました。

燃えあがる若葉の意義を以て、「婦人運動」の存在を意氣あらしめるために大いにやろう、かう私はわれと我が心に鞭うちます。

原稿募集！

創作、うた、詩、生活記錄、職業記錄、

各地の報告、反駁文

世にかくれたすぐれた婦人を紹介することが本誌の本領です。どし〳〵送つて下さい。

前納誌代

◇誌代はすべて前納にして下さい

壹部	貳拾五錢
半年分	壹圓四十錢(郵稅五厘)
壹年分	貳圓八十錢

送金法

送金は振替が一番便利です。
誌代の受取證は別に出しません。
雜誌發送を以てこれに代へます。

昭和三年四月卅日納本
昭和三年五月一日發行

東京市外中野町園三二四四
發行編輯兼印刷者　奥むめお

東京市神田區淡路町二ノ三
印刷所　協營社

東京牛込區市ケ谷本村町四
發行所　職業婦人社
振替東京六四一六〇番

●●●●●●●●●●●●●●バートランド・ラッセル氏曰く　私は此の素晴しく大膽な本を讀んで深い感銘を受けた。茲に初めて婦人に關する眞實が語られたのだ。頗る意義ある作品である。

女〇

マグダレン・マルクス著

山田わか譯

●●●●●●●●●●●●ロマン・ローラン氏曰く　それは大天才の創作だ。力ある作品だ。

●●●●●●●●●●ヴイクター・マリゲリット氏曰く　此の美しい本は偉大な個性を否認する事の出來ない保證だ。

婦人評論家として知られた山田わか子女史が佛蘭西の閨秀作家であり兼ねて共産黨員として活躍してゐるマグダレン・マルクス女史の創作を譯されたものである。單に一人の男性を對象とせず萬人の男性を愛する事が新時代の戀愛だと喝破し女性として或は母性として一々鋭い内省のメスを振ひ女の赤裸々な魂の正體を最も大膽に描寫し歐洲の讀書界を震駭せしめ本國の佛蘭西では羽が生えて飛ぶ様に賣れ到る處で盛大な講演會が開かれ凡ゆる著名な哲學者、批評家、小説家から熱狂的賞讚の聲を浴せられ今や爭ふて各國語に飜譯されつつある世界的空前の名著である。新時代の婦人を語る者は先づ本書を繙け。

四六半　四〇〇頁

定價　一圓八〇錢

送料（書留）一八錢

東京　麹町　下六番町

平凡社

電話九段 一六六四番 三六四七番 三四七五番

振替東京二九六三九番

中西伊之助著（最新刊）

創作 熱風

大正十三年十一月二十二日第三種郵便物認可
昭和三年四月三十日印刷納本
昭和三年五月一日發行（毎月一回一日發行）